

(25-1) Pañcabhikkhuvatthu 五人の比丘たちの物語 360-361 Telapatta-jātaka(96)

◆ cakkhunā samvaroti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto pañca bhikkhū ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、五人の比丘たちについて語られたものである。

彼ら五人のうち一人一人は、眼の入り口など五つの感官の入り口のうち、一つずつを守っていた。さてある日、五人が集まって、「私は守り難いものを守っている」「私こそ守り難いものを守っている」と論争になり、「師にお訊ねしてこのことを決しよう」と師のもとへ行き、

「尊師よ、私たちは眼の入り口などを守っているのですが、それぞれが自分の守っているものこそが守り難いものだと考えています。いったい私たちのうち、誰が守り難いものを守っているのでしょうか」と質問した。師は一人の比丘も除外せずに、「比丘たちよ、それらの感官はすべて守り難いものです。また、あなたがたが今〔1つの感官だけを守って〕五つの感官〔全て〕を制御していないように、過去世でも制御していませんでした。制御していなかったために、賢者たちの訓戒をないがしろにして、命を落とすことになったのです」とおっしゃると、「いつのことですか、尊師よ」と五人の比丘に懇願されて、過去世の「タッカシラー前生物語 Telapatta-jātaka(96)」を詳しく語られた。

過去物語

〔前世で菩薩の家臣であった五人がタッカシラーへいく途中、羅刹女の誘惑に負けて、〕羅刹女たちのために、〔タッカシラーの〕王家で〔王を始めすべての者たちが〕命を落としたときに、王としての灌頂を受けた偉大な人(菩薩)が白い傘蓋の下で王の座にすわっている自分の栄華を観察して、「この勇猛心こそが衆生のなすべきことである」と言って、感興の語を発するようにして唱えた。「善いひとの教えに堅固な決意を保ち、怖れ怯むことなくどまったので、羅刹女の虜に私は陥らなかった、大いなる恐怖から私には安心があった。」と。

この詩句を示して、「そのときもあなたがた五人は、タッカシラーで王国を手に入れるために出発した偉大な人を、手に武器をもって囲んで道を進んで行きましたが、道の途中で羅刹女たちに、眼の入り口などを通して入ってくる容色などの対象に対して制御されていなかったために、賢者の訓戒を捨てて羅刹女に魅入られ、食べられて命を落とすに至りました。しかし、これらの〔五つの〕感官の対象に対してよく制御され、次々後ろから追いかけて来る夜叉女に心奪われず、無事にタッカシラーに行き、王権を獲得した王がこの私でした」と、『前生物語』を締めくくられて、「比丘というものは、すべての感官の入り口を制御して塞いでおかねばなりません。これらを覆って制御している者は、すべての苦しみから解放されるからです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「360 眼による制御は良い、耳による側は良い、鼻による制御は良い、舌による制御は良い、」 「361 身体による制御は良い、言葉による制御は良い、意識による制御は良い、あらゆる場所で制御は良い、あらゆる場所で制御された比丘は、あらゆる苦しみから解放される。」と。

法話が終わったとき五人の比丘たちは預流果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.218 (2013 年 4 月) 竜巻の真っ只中に生きる 危害を減らすために理性が必要 Life is a tornado. Can you survive?

360. Cakkhunā samvaro sādhu, sādhu sotena samvaro; Ghānena samvaro sādhu, sādhu jivhāya samvaro.

361. Kāyena samvaro sādhu, sādhu vācāya samvaro; Manasā samvaro sādhu, sādhu sabbattha samvaro; Sabbattha samvuto bhikkhu, sabbadukkhā pamuccati.

360. 眼(め)による統御(とうぎょ)まことよく 善き哉 耳(みみ)による統御 鼻(び)による統御 まことよく 善き哉 舌(した)による統御

361. 身(み)による慎しみ まことよく 善き哉 言葉に慎しむは 意による慎しみ まことよく 善き哉 すべてに慎しむは 比丘はすべてに慎しめば あらゆる苦より 放たるる 訳：江原通子

360. Cakkhunā samvaro sādhu, sādhu sotena samvaro; Ghānena samvaro sādhu, sādhu jivhāya samvaro.

360. 眼(視覚機能)によって統御することは、善きことである。耳(聴覚機能)によって統御することは、善きことである。鼻(嗅覚機能)によって統御することは、善きことである。舌(味覚機能)によって統御することは、善きことである。

チャックナー サンワロー サードウ サードウ ソーテーナ サンワロー
Cakkhunā samvaro sādhu, sādhu sotena samvaro;
眼(視覚機能)によって統御することは、善きことである。善きことである。耳(聴覚機能)によって統御することは、
Cakkhunā/cakkhu(n.sg.inst)眼,目 samvaro/samvara(m.sg.nom)[<samvarati]防護,律儀,摂護 sādhu/sādhu(a.adv.interj)[//<sādh]善
き,善良の,善人,善く; 善い哉,善哉,何卒,どうぞ,幸甚なり, sādhu/ sotena/sota: ①(n.sg.inst)[śru]耳②(m.n)[sru]流,流水,流口
samvaro/;

ガーネーナ サンワロー サードウ サードウ ジウハーヤ サンワロー
Ghānena samvaro sādhu, sādhu jivhāya samvaro.
鼻(嗅覚機能)によって統御することは、善きことである。善きことである。舌(味覚機能)によって統御することは、
Ghānena/ghāna(n.sg.inst)鼻 samvaro/ sādhu/, sādhu/ jivhāya/jivhā(f.sg.inst)舌 samvaro/.

361. Kāyena saṃvaro sādhu, sādhu vācāya saṃvaro; Manasā saṃvaro sādhu, sādhu sabbattha saṃvaro; Sabbattha saṃvuto bhikkhu, sabbadukkhā pamuccati.

361. 身体（身）によって統御することは、善きことである。言葉（口）によって統御することは、善きことである。意（意）によって統御することは、善きことである。一切所において統御することは、善きことである。一切所において統御された比丘は、一切の苦しみから解き放たれる。

カーイェーナ	サンワロー	サードウ	サードウ	ワーチャーヤ	サンワロー
Kāyena	saṃvaro	sādhu,	sādhu	vācāya	saṃvaro;

身体（身）によって統御することは、善きことである。 善きことである。 言葉（口）によって統御することは、
Kāyena/kāya(m.sg.inst)身,身体,集まり-saṃvara 身律儀 **saṃvaro/ sādhu/**, **sādhu/ vācāya/vaco:vaca**(n→f.sg.inst)[Sk.vacas]語,言
saṃvaro/;

マナサー	サンワロー	サードウ	サードウ	サツバッタ	サンワロー
Manasā	saṃvaro	sādhu,	sādhu	sabbattha	saṃvaro;

意（意）によって統御することは、善きことである。 善きことである。 一切所において統御することは、善きことである。
Manasā/mānasa(n)mānasāna(a.n.sg.inst)[=manas]意,心意 **saṃvaro/ sādhu/**, **sādhu/ sabbattha/** sabbattha : ①(m)[sabba-attha]一切義
 ②(adv)[Sk. sarvatra]一切処に,いつでも,どこでも **saṃvaro/**;

サツバッタ	サンウトー	ビク	サツバドゥッカー	パムツチャティ
Sabbattha	saṃvuto	bhikkhu,	sabbadukkhā	pamuccati.

一切所において統御された比丘は、 一切の苦しみから 解き放たれる。
Sabbattha/ saṃvuto/saṃvuta(a)[saṃvarati の pp]防護せる,制御せる; 閉じたる,結べる← **ssaṃvarati**(v.pp)[saṃ-vr]防護す,制御す
bhikkhu/bhikkhu(m)[Sk.bhikṣu <bhikkhati]比丘,乞者,乞食者, **sabbadukkhā=sabba/sabba**(a.代的 m.n 持)[Sk.sarva]一切の,すべて,
 一切のもの+**dukkhā/dukkha**(a.n.sg.dat)苦,苦痛,苦悩 **pamuccati/pamuccati**(v.pr.3sg)←**pamuñcati**(v.pass)[pa-muc]脱す,解脱す,出す,
 放つ; 捨つ,自由にす pass.pamuccati のがれる,自由にされる。

(25-2) Hamsaghātakabhikkhuvatthu ハンサ鳥を殺した比丘の物語 362 Kurudhamma-jātaka(276), Sālittaka-jātaka(107)

◆ hatthasamyatoti imaṃ dhammaśāsanam sathā jetavane viharanto ekaṃ hamsaghātakam bhikkhum ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ハンサ鳥を殺した比丘について語られたものである。

サーヴァッティー市の二人の友人同士の比丘は、出家して具足戒を受けても、ほとんど一緒に行動していた。二人はある日、アチラヴァティー河に行き水浴びしてから、日向ぼっこをしながら思い出話をして過ごしていた。そのとき、二羽のハンサ鳥が空から降りてきた。すると、若い比丘が小石を取って、「一撃で一羽のハンサ鳥の子供の目を打ってみせよう」と言った。もう一方の比丘は「やめておきたまえ」と言った。「まあ見ていたまえ。こちら側のハンサ鳥の目からあちら側のハンサ鳥の目を打ち抜くからね。」「そんなことはするべきじゃない。」「まあ見ているがいいさ」と三角の小石を取って、後から投げた。ハンサ鳥は小石の音を聞いて、後戻りしてよく観察した。ところが、もう一方のハンサ鳥は回転して飛んでくる小石にあたり、その小石は片方の目を打って反対側の目から出た。ハンサ鳥は悲痛な叫びをあげて回りながら、彼らの足元に落ちた。〔小石を投げる男の話 Sālittaka-jātaka(107)〕

あちらこちらに立っていた比丘たちはこれを見て、「ご同朋よ、ブッダの教えに出家したのに、あなたがたは相応しくないことをしました。殺生をしたのですから」と言って、彼らを連れて行き如来に会わせた。師は、「比丘よ、あなたが殺生をしたというのはまことですか」とお訊ねになり、「まことでございます、尊師よ」と答えると、「比丘よ、どうしてこのような救いに導く教えで出家して、そのようなことをしたのですか。昔の賢者たちは、ブッダが未だ現れないときに、家に住みながら怠慢のない状態でも〔これでよいのか〕疑念を抱いたものです。ところが、あなたはこのような教えで出家して、疑念すらも起こさなかったのです」とおっしゃって、比丘たちに請われて過去の事を取り出された。

過去物語

昔、クル国のインダパッタナ市でダナンジャヤ王が治めていたとき、菩薩は王の第一王妃の胎内に生をうけ、次第に分別がつく年頃になると、タッカシラーでさまざまな技芸を学び、父王によって副王の地位に任ぜられた。後に父王が亡くなると王位を継いで、十の王の勤めに外れることなく、クル国の法を行った。クル国の法とは、五成であった。それらを菩薩は完全に清らに行なっていて守っていた。また、菩薩と同様に、(1)菩薩の母も、(2)第一王妃も、(3)弟の副王も、(4)宮廷祭官の婆羅門も、(5)土地監視人の大臣も、(6)御者も、(7)長者も、(8)ドーナの収入監督者、(9)門番も、(10)遊女も、(11)美しい奴隷女もと、このように十一種の人々もクル国の法を守っていた。 kurudhammo nāma pañcasilāni, tāni bodhisatto parisuddhāni katvā rakkhi. yathā ca bodhisatto, evamassa (1)mātā (2)aggamahesī (3)kaniṭṭhabhātā uparājā (4)purohito brāhmaṇo (5)rajjugāhako amacco (6)sārathi (7)seṭṭhi (8)doṇamāpako mahāmatto (9)dovāriko (10)nagarasobhinī (11)vaṇṇadāsīti evametesu ekādasasu janesu kurudhammam rakkhantesu

一方、カリンが国ではダンプラ市でカリンが国王が治めていたが、その国では雨が降らなかった。偉大な人のアンジャナヴァサバという祭礼用の象には大きな福德があった。「あの象を連れてきたら雨が降るだろう」という知恵を、人々は王に告げた。王はその象を連れてくるために、婆羅門たちを使者として派遣した。彼らは出かけて行って、偉大な人に象を与えてほしいと懇願した。

師はこの懇願の次第を示すために、「あなたの信心と戒を知って、国王よ、黄金をアンジャナの色(象)と、カリンが国で交換しましょう。」と、「クル国の法前生物語 Kurudhamma-jātaka(276)」を語られた。

しかし、象が連れてこれられても〔カリンが国では〕雨が降らなかったのので、「あの国王はクル国の法を守っている。それによってあの国では雨が降るのだ、と思い、「彼が守っているクル国の法を金の板に書いて持ってきなさい」と、ふたたびカリンが国王は婆羅門たちと大臣たちを派遣した。彼らがクル国へ行って懇願すると、王を始めとして皆が自分の戒が完全ではないと何らかの疑念を持っていたので、「私たちの戒は完全無欠ではありません」と言って断ったが、「これまでは戒を破ることはなかったのでしょうか」と何度も何度も懇願して、自分たちの戒を語らせた。

カリンが国王は金の板に書かせてもたらされたクル国の法を見て、そのとおりに正しく戒を全うした。すると、彼の国に雨が降った。国は平和で豊穡になった。

師はこの過去の事を取り出されて、「(10)遊女はウッパラヴァンナーで、(9)プンナはそのとき門番で、(5)土地監視人はカッチャーナで、(8)ドーナの収入監督者はコーリタ(マハー・モッガッラーナ)で、(7)サーリプッタはそのときの長者で、(6)アヌルッタは御者、(4)婆羅門はカッサパ長老で、(3)副王はアーナンダ賢者、(2)王妃はラーフラの母で、(1)マーヤー妃は〔菩薩の〕母で、クル国王は菩薩であった、このように前生物語を記憶せよ。“(10) ganikā uppalavannā, (9)puṇṇo dovāriko tadā. (5)rajjugāho ca kaccāno, (8)doṇamāpako ca kolito. “(7)sāriputto tadā seṭṭhī, (6)anuruddho ca sārathī. (4)brāhmaṇo kassapo therō, (3)uparājānandapaṇḍito. “(2)mahesī rāhulamātā, (1)māyādevī janettikā. kururājā bodhisatto, evaṃ dhāretha jātakan”ti. —」と。

このように前生を結び付けられて、「比丘よ、このように過去世では、賢者たちは油断なく戒を守っていても、疑念を生じて自分が戒を破ったのではないかと疑ったのです。ところが、あなたは私のようなブッダの教団で出家していながら殺生を行うとは、罪深いことをしました。比丘というものは、手によっても足によっても言葉によっても、制御されているべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「362 手において制御され、足において制御され、言葉において制御された者は、最高に制御されている。自分の内に楽しみ、精神集中し、独りで満足する、その人を比丘という。」と。

法話が終わったとき、多くの人が預流果などを獲得した。

No.220 (2013 年 6 月) 操縦不可能な命 智者は自己制御をする Life is out of control.

362.Hatthasamyato pādasamyato, Vācāamyato samyattutamo; Ajjhatarato samāhito, Eko santusito tamāhu bhikkhum..

362.手をも足をも慎しみて 言葉も慎しむ 最高者 内に心の悦びて 安定統一独り居て 足りたる人を「比丘」と言う

訳：江原通子

362. Hatthasamyato pādasamyato, vācāsamayato samyatatuttamo; Ajjhatarato samāhito, eko santusito tamāhu bhikkhum.
 362.手によって自制され、足によって自制され、言葉によって自制された、最上の自制者――内に喜び、〔心が〕定められた者――〔常に〕満ち足りている、独りある者――彼を、〔賢者たちは〕「比丘」と言う。

ハッタサンヤトー パーダサンヤトー ワーチャーサンヤトー サンヤトウッタモー

Hatthasamyato pādasamyato, vācāsamayato samyatatuttamo;

手によって自制され、足によって自制され、言葉によって自制された、最上の自制者

Hatthasamyato=hattha/hattha(m 依対)[<hr Sk.hasta]手,手掌; 肘[長さの単位,24 指節 aṅgula-pabba 1/4 尋 vyāma]

+samyato/samyata(a.m.sg.nom)←samyamati(v)[sam-yam]抑制す,自制す pādasamyato=pāda/pāda(m 依対)[〃]足;麓.ふもと; 貨幣の単位 [1/4 カハーパナ,5 マーサカ]+samyato/, vācāsamayato=vācā/vācā(f)語,言+samyato/ samyatatuttamo=samyata//samyata(a 依属)+uttamo/uttama(a 代的 m.sg.nom)[ud:最上級]最上の,最高の;

アジャッタラトー サマーヒトー エーコー サントウスイトー タマーフ ビククン

Ajjhatarato samāhito, eko santusito tamāhu bhikkhum.

内に喜び、〔心が〕定められた者 独りある者 [常に]満ち足りている、彼を、言う。〔賢者たちは〕「比丘」と

Ajjhatarato=ajjhata/ajjhata(a)[adhi-atta,Sk.adhyātman]自の,内の,個人的な+rato/rata(a.m.sg.nom)[ramati ram のpp]楽しめる,愛好せる samāhito/samāhita (a.m.sg.nom)←samādahati(v,pp) : ①[=samādhēti,sam-ā-dhā]定める,置く,(心を)統一する②[sam-ā-dah]燃やす,焼く,eko/eka(a.num.m.sg.nom)[〃]一,一つ,或る santusito/santusita(a.m.sg.nom)←santussati(v,pp)[sam-tuṣ]満足す,喜ぶ tamāhu=tam/ta(人指示代 m.sg.acc)彼,その,彼女+āhu/āha(v 完了 3pl)[〃]言う,言った. 2sg,3sg. āha;3pl.āhu,āhaṃsu bhikkhum/bhikkhu(m.sg.acc)[Sk.bhikṣu <bhikkhati]比丘,乞者,乞食者。

(25-3) Kokālikavatthu コーカリーカの物語 363 Takkāriya-jātaka(481),Kacchapa-jātaka(215)

◆ yo mukhasaṃyatoṭi imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto kokālikaṃ ārabha kathesi. vatthu “atha kho kokālika bhikkhu yena bhagavā tenupasaṅkami”ti sutte (saṃ. ni. 1.181; su. ni. kokālikasutta; a. ni. 10.89) āgatameva. atthopissa aṭṭhakathāya vuttanayeneva veditabbo.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、コーカリーカについて語られたものである。物語は、「さて実に、コーカリーカ比丘は世尊のおられるところに近づいた」と経に出てくる通りである。その意味も〔経の〕註釈に述べられているように知られるべきである。〔Sn.3-10. Kokālikasuttaṃ コーカリーカ経 662(657)-683(678)〕

コーカリーカが紅蓮地獄に再生したとき、法堂で話が持ち上がった。「なんと、コーカリーカ比丘は自分の口のせいで、身の破滅を招きました。二人の上首の弟子たち(サーリプックとマハー・モッガラナ)を誹謗したために、大地が裂け〔て彼を地獄へと落とし〕ました。」〔タッカーリヤ前生物語 Takkāriya-jātaka(481)〕

師が来られて、「比丘たちよ、何の話で、今ここに集まってすわっているのですか」とお訊ねになり、「しかじかのことでございます」と比丘たちが答えると、師は、「比丘たちよ、今だけではありません。過去世でも、コーカリーカ比丘は自分の口が災いして破滅しました」とおっしゃって、その意味を聞きたがる比丘たちに懇願されて、それをあきらかにするべく、過去の事を取り出された。

過去物語——口が災いした亀

昔、ヒマラヤ山脈のある湖に亀が住んでいた。二羽の若いハンサ鳥が餌場を歩いていたが、その亀と親しくなり、堅い友情で結ばれた。ある日、ハンサ鳥たちは亀に訊ねた。「君、私たちには、ヒマラヤ山脈のチッタラクータ山の平野に黄金の洞窟というとても気持ちのよい住まいがあります。私たちと一緒にいきますか。」「私はどうやって行けますか。」「もし口をしっかりと閉じていることができるならば、私たちがあなたを逃れていきましょう。」「しっかりと閉じていきます。私を連れて行ってください。」ハンサ鳥たちは「わかりました」と言って、一木の棒を亀に咥えさせ、自分たちはその両端を咥えて空に飛び上がった。

亀がそのようにしてハンサ鳥たちに運ばれていると、村の子供たちがそれを見て、「二羽のハンサ鳥が亀を棒で運んでいるよ」と言った。亀は、「友人たちが私を連れて行くのに、お前たちに何の用があるのだ、小僧ども」と言おうとして、ハンサ鳥たちの速力のために、パーラーナシー市の王宮の上にさしかかったときに、咥えている場所から棒を離してしまい、王宮の屋上庭園に落ちて、二つに割れてしまった。

師はこの過去物語を取り出されて、「亀は声を出して、自分を殺してしまった。木切れをしっかりと咥えていたのに、自らの言葉で死んでしまった。これを見て、勇猛心に勝れた人よ、良い、しかし長すぎない言葉を発するべきだ。あなたは見た、喋り過ぎて、亀が破滅に陥ったのを。」と、この『亀前生物語 Kacchapa-jātaka(215)』を詳しく語られて、「比丘たちよ、比丘というものは、口を慎んで振る舞い、驕り高ぶらず、心を制御しているべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「363 口に慎みあり、智慧を語り、高ぶらない比丘は、意味と法を輝かせる。彼の語ることは心地よい。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.221 (2013 年 7 月) 自己破壊を招く「おしゃべり屋」 正しく語ることも修行のひとつです Are you talkative or eloquent?

363.Yo mukhasaṃyato bhikkhu, Mantabhānī anuddhato; Atthaṃ dhammaṇca dīpeti, Madhuraṃ tassa bhāsitaṃ.

363.比丘ありて 言葉つつしみ智慧もて語り 穏やかに義と法を説く 彼説くところ その言(げん)や好し 訳: 江原通子

363. Yo mukhasaṃyato bhikkhu, mantabhānī anuddhato; Atthaṃ dhammaṇca dīpeti, madhuraṃ tassa bhāsitaṃ.

363.彼が、口によって自制された比丘として、明慧によって話し、〔心が〕高ぶらず、義(道理)を〔明らかにし〕、かつまた、法(真理)を明らかにするなら、彼の語るところは、〔蜜のように〕甘美である。

ヨー ムカサンヤトー ビック マンタバニー アヌグダトー

Yo mukhasaṃyato bhikkhu, mantabhānī anuddhato;

彼が、口によって自制された比丘として、明慧によって話し、〔心が〕高ぶらず、

Yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの mukhasaṃyato=mukha/mukha(n 依対)[々]口,入口,門;顔,面,前面,頂点 +saṃyato/saṃyato(m.sg.nom)←saṃyamati(v.pp)[saṃ-yam]抑制す,自制す bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu <bhikkhati]比丘,乞者,乞食者, mantabhānī=manta/manta(a 依属)?←mantā(a)←manteti(v.ger)[mant cf.Sk.mantrayati]考量す,相談す,助言す,忠告す;密語す (manta(m 依属)[Sk.mantra]呪,呪文,呪語,呪術,真言; 經典,經文,聖典,聖言,グエータ) +bhānī/bhānī(a.m.sg.nom)[bhāṇa-in]誦出者,誦説する anuddhato/anuddhata(a.m.sg.nom)[an-uddhata]掉挙ならざる,躁心なき,落著きたる;

アッタン ダンマンチャ ディーペーティ マドウラン タッサ バースイタン

Atthaṃ dhammaṇca dīpeti, madhuraṃ tassa bhāsitaṃ.

義(道理)を、かつまた、法(真理)を 明らかにするなら、〔蜜のように〕甘美である。 彼の 語るところは、

Atthaṃ/attha: ①(m.n.sg.acc)[Sk.artha]義,利益,道理,意味,必要,裁判②(n)[Sk.asta]atthaṃ gacchatī[日が西に]没す,帰る dhammaṇca=dhammaṇ/dhamma(m.n.sg.acc)法,教法,真理,正義+ca/ dīpeti/dīpeti(v.pr.3sg)[Sk.dīpayati.dīp の caus.cf.dīpati]輝やかす,明るくす,説明する, madhuraṃ/madhura(a.n.sg.nom)[<madhu]蜜の如き,甘き,美味の;美味;好言 tassa/ta(人指示代 m.sg.gen)彼,その,彼女 bhāsitaṃ/bhāsita(a.n.sg.nom)[bhāsati ①:pp]語れる,言える,説ける;言説,所説←bhāsati: ①(v.pp)[Sk.bhāṣate bhāṣ]話す,語る,言う②(v)[Sk.bhāṣate bhāṣ]照る,輝やく。

(25-4) Dhammārāmattheravattthu ダンマーラーマ長老の物語 364

◆ dhammārāmōti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto dhammārāmattheraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ダンマーラーマ(法を園とする)長老について語られたものである。

師によって「これから四カ月後に、私の般涅槃があるでしょう」と告げられたとき、何千人もの比丘たちが師を取り囲んで歩いた。その中で普通の人々は、涙を抑えることができなかった。煩惱を滅した者たちには、法への焦燥心が起こった。皆が「我々はどうしたらよいだろう」とグループを作って歩いた。しかし一人、ダンマーラーマという比丘は、他の比丘たちのそばに行かなかった。

比丘たちに、「ご同朋よ、どうしたのですか」と話しかけられても返事もせずに、「師が四カ月後に般涅槃されるようだ。私はまだ欲望を捨てきていない。師がご存命のうちに努力して、阿羅漢果に到達しよう」と、一人きりで過ごし、師によって説かれた法を心に念じ、考え、憶念した。

比丘たちはそのことを如来に告げた。「尊師よ、ダンマーラーマにはあなたさまへの愛情すらありません。『師が般涅槃されるようだ。私たちはどうしたらよいだろう』と、我々と一緒に相談すらもしません。」師はダンマーラーマを呼んでこさせて、「あなたがしかじかのようにしている、というのはまことですか」とお訊ねになった。「まことでございます、尊師よ。」「どうしてですか」「あなたさまは四カ月ののちに般涅槃されるそうです。私はまだ欲望を捨てきていません。あなたさまがご存命のうちに、阿羅漢果に到達したいのでございます。」

師は、「立派だ、立派だ」と彼を称賛して、「比丘たちよ、他の者も、私に愛情がある比丘は、ダンマーラーマと同じようにするべきです。私に花輪や香などで供養するのは、供養していることになりません。法とそれに付随する法を実践することこそ、私を供養することになるのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「364 法を園とし、法を楽しみ、法をよく吟味し、法を憶念する比丘は、正しい法から墮落しない。」と。

法話が終わったとき、その比丘は阿羅漢果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.222 (2013 年 8 月) 真理と事実 事実を知ること、真理に達すること Discover the facts and realize the truth.

364.Dhammārāmo dhammarato Dhammaṃ anuvicintayaṃ Dhammaṃ anussaraṃ bhikkhu Saddhammā na parihāyati

364.法に囲まれ(法を住処にし)法悦し 正しき法を識り分けて 正しき法を憶う比丘 妙なる法から退かず 訳: 江原通子

364. Dhammārāmo dhammarato, dhammaṃ anuvicintayaṃ; Dhammaṃ anussaraṃ bhikkhu, saddhammā na parihāyati.

364.法(真理)を喜びとし、法(真理)に喜びあり、法(真理)を〔常に〕弁別し、法(真理)を〔常に〕随念している比丘は、正なる法(真理)から衰退しない。

ダンマーラーモー	ダンマラトー	ダンマン	アヌヴィチンタヤン
Dhammārāmo	dhammarato,	dhammaṃ	anuvicintayaṃ;
法(真理)を喜びとし、	法(真理)に喜びあり、	法(真理)を	〔常に〕弁別し、

Dhammārāmo=dhamma/dhamma(m.n 有属)法,教法,真理,正義+ārāmo/ārāma(m.sg.nom) (Skt. ārāma, ā-ram)(1)喜悦,歓喜,幸福(2)楽しむ場所,遊園,園林,公園,僧園 dhammarato=dhamma/dhamma(m.n 依対)+rato/rata(a.m.sg.nom)[ramati ram の pp]楽しめる,愛好せる←ramati(v)[// ram]楽しむ,喜ぶ, dhammaṃ/dhamma(m.n.sg.acc) anuvicintayaṃ/anuvicintayaṃta(m.sg.nom)←anuvicinteti(v.ppr) [anu-vi-cinteti]思念す,思惟す;

ダンマン	アヌッサラン	ビク	サツダンマー	ナ	パリハーヤティ
Dhammaṃ	anussaraṃ	bhikkhu,	saddhammā	na	parihāyati.
法(真理)を	〔常に〕随念している	比丘は、	正なる法(真理)から	衰退しない。	

Dhammaṃ/dhamma(m.n.sg.acc) anussaraṃ/anussaranta(a.m.sg.nom.)←anussarati(v.ppr)[anu-sarati,Sk. anusmarati]随念す,憶念す bhikkhu/, saddhammā/saddhamma(m.sg.abl)[sat-dhamma]正法,妙法 na/ parihāyati/parihāyati(v.pr.3sg)[pari-hā]衰退す,衰損す,損減す,衰亡す

◆ salābhanti imam dhammadesanam satthā veḷuvane viharanto aññataram vipakkhasevakam bhikkhum ārabha kathesi.

この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、裏切り行為をした比丘について語られたものである。

この比丘にはデーヴァダッタに味方する友人がいた、ということである。その比丘は友人の言葉に従って、数日彼のもとで過ごしてから自分の住む場所に帰った。すると、比丘たちはその比丘について、「尊師よ、彼はデーヴァダッタが受けた利得と尊敬を享受しています。彼はデーヴァダッタに味方するものです」と如来に言いつけた。

師は彼を呼んでこさせて、「あなたがしかじかのことをした、というのはまことですか」とお訊ねになった。「まことです、尊師よ。私はそこである見習い比丘のもとで数日過ごしました。しかし、デーヴァダッタの教えを受け入れていません。」すると、師は彼に、「たとえあなたが何も教えを受け入れていなくても、会った人の教えをいちいち受け入れているかのように見えるものです。あなたは今、そのようなことをしてはいけません。過去世でも同じことをしましたから」とおっしゃると、「尊師よ、彼は、今は私たちと同じ見方をしています。しかし過去世では、彼は誰の見解を奉じていたのですか。私たちに話してください」と、比丘たちに懇願されて、過去の事を取り出された。

過去物語

「バーラーナシーでブラフマダッタ王が治めていたとき、王の象マヒラームカが、盗賊たちの話を自分の教育のためと思い、乱暴に人を殺すようになったが、大臣であった菩薩がそのわけを知り、良い婆羅門や修行者の話を聞かせるようにして、悪い行いをしないようにさせた。そのことを王に報告して、菩薩は次の詩句を唱えた。」

「以前は盗賊たちの言葉に従って〔象の〕マヒラームカは〔人々を〕打ち殺しつつ歩いたが、よく自制された人々の言葉に従って、最上の象はあらゆる良い性質を具えた。」と、この「マヒラームカ前生物語 Mahilāmukha-jātaka(26)」を詳しく語られて、「比丘たちよ、比丘というものは、自分の得るもので満足すべきです。他人の利得を求めるべきではありません。他人の利得を求める者は、禅定と内観の道果のうち一つの法も得ることができません。しかし、自分の利得に満足するものには、禅定などで成果が得られます」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「365 自分の得たものをおろそかに思うな、他人の得たものに妬ましそうにするな、他人を妬む比丘は、心の集中を得られない。」「366 得るものが少ない比丘も、自分の得たものをおろそかに思わなければ、怠ることなく清らかな生活を送る彼を、神々は褒め称える。」と。法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.223 (2013 年 9 月) 小さな火種 悩み苦しめは不注意で拡大する Do not nourish your worries.

365. Salābham nātimaññeyya, Nāññesaṃ pihayaṃ care; Aññesaṃ pihayaṃ bhikkhu, Samādhim nādhigacchati.

366. Appalābhopi ce bhikkhu, Salābham nātimaññati; Taṃ ve devā pasamsanti, Suddhājīvim atanditaṃ

365. 行乞の施(せ)を軽んずな 他者(ひと)の得たるを羨むな 他者を羨むその比丘は 三昧境に達し得ず

366. たとえ得しもの僅かでも比丘はそれをば軽んぜず 息(やす)むことなく清らかに生くる彼をば神も讃む 訳：江原通子

365. Salābham nātimaññeyya, nāññesaṃ pihayaṃ care; Aññesaṃ pihayaṃ bhikkhu, samādhim nādhigacchati.

365. 自らの利得(行乞で得た施物)を軽んじないように。他者たち〔の利得〕を羨む者として歩まないように。他者たち〔の利得〕を羨んでいる比丘は、〔心の〕統一に到達しない。

サラバン ナーティマンニエツヤ ナーンニエーサン ピハヤン チャレー
Salābham nātimaññeyya, nāññesaṃ pihayaṃ care;
自らの利得(行乞で得た施物)を 軽んじないように。 他者たち〔の利得〕を 羨む者として 歩まないように。
Salābham/salābha(m.sg.acc)[sva-lābha]自利,己利,自己の所得 nātimaññeyya=na/+atimaññeyya/atimaññati(v.opt.3sg)[Sk.atimanyate]
軽蔑す,無視す, nāññesaṃ=na/+aññesaṃ/añña(a 代 m.pl.gen)[Sk.anya]他の,異なる,余他の
pihayam/pihayanta(a.m.sg.nom)←pihayati:piheti[Sk.sprhayati<sprh]: ①(v)熱望す(acc とともに). ②(v.ppr)羨む,うらやむ(gen とともに) care/carati(v.opt.3sg)[//car]行く,行ず,歩く;

アンニエーサン ピハヤン ビック サマーディン ナーディガツチャティ
Aññesaṃ pihayaṃ bhikkhu, samādhim nādhigacchati.
他者たち〔の利得〕を 羨んでいる 比丘は、 [心の]統一に 到達しない。
Aññesaṃ/añña(a 代 m.pl.gen)[Sk.anya]他の,異なる,余他の pihayaṃ/pihayanta(a.m.sg.nom)←pihayati:piheti[Sk.sprhayati<sprh]: ①(v)熱望す(acc とともに). ②(v.ppr)羨む,うらやむ(gen とともに) bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘,乞者,乞食者, samādhim/samādhi(m.sg.acc)[<saṃ-ā-dhā]定,三昧,三摩地,等持,精神統一 nādhigacchati=na/adhigacchati/adhigacchati(v.pr.3sg)[adhi-gam]到達す,証得す。

366. Appalābhopi ce bhikkhu, salābham nātimaññati; Taṃ ve devā pasamsanti, suddhājīvim atanditaṃ.

366. たとえ、もし、〔得られた〕利得が僅かであるも、比丘が、自らの利得を軽んじないなら、彼を、まさに、休むことなく〔励み〕清浄の生き方ある〔その比丘〕を、天〔の神々〕たちは賞賛する。

アッパラーポーピ チュー ビック サラーバン ナーティマンニヤティ
Appalābhopi ce bhikkhu, salābham nātimaññati;
〔得られた〕利得が僅かであるも、たとえ、もし、 比丘が、 自らの利得を 軽んじないなら、
Appalābhopi=Appa/appa(a.n 有持)少き,些細の;少量,些細+lābho/lābha(m.sg.nom)得,利,利得,利養+pi[pi=api](adv.conj)も,亦,いへども,けれども,たとい...でも ce/ce(conj)もし,若し.apice たとえ...でも bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom), salābham/salābha(m.sg.acc)[sva-lābha]自利,己利,自己の所得 nātimaññati=na/+atimaññati/atimaññati(v.pr.3sg)[Sk.atimanyate]軽蔑す,無視す ;

タン ヴェー デーワー パサンサンティ スッダージーヴィン アタンディタン
Taṃ ve devā pasamsanti, suddhājīvim atanditaṃ.
彼を、まさに、天〔の神々〕たちは 賞賛する。 清浄の生き方ある〔その比丘〕を、 休むことなく〔励み〕
Taṃ/ta(人指示代 m.sg.acc)彼,その,彼女 ve/ve(adv)実に devā/deva(m.pl.nom)[//]天,神,王,天皇,陛下 pasamsanti/pasamsati(v.pr.3pl)[pa-sams]ほめる,賞讃す, suddhājīvim=suddha/suddha(a 持)[sujjhati:pp]浄き,清浄の,純粹の+ājīvim/ājīvin(a.m.sg.acc)[ājīva-in]生活せる←ājīva(m)[//ā-jīva]活命,命,生活←jīva(n)生命,命,靈魂 atanditaṃ/atandita(a)[a-tandita]倦怠なき,活動的な,努力する
←tandeti(denominative.v.ppr)倦怠する,懶惰する←tandī(f)[Sk.tandri]倦怠,懶惰。

(25-6) Pañcaggadāyakabrāhmaṇavatthu 五つの最初のものを布施する婆羅門の物語 367

◆ sabbasoti imaṃ dhammaḍḍesaṇaṃ sathā jetavane viharanto pañcaggadāyakaṃ nāma brāhmaṇaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、五つの最初のものを布施する婆羅門について語られたものである。

その婆羅門は作物が実ったとき、田の最初の収穫を布施した、ということである。脱穀のときには、粃米の最初のものを布施した。粃米を搗くときは、搗いた米の最初のものを布施した。竈で炊くときは、鍋の上の一番美味しいところを布施した。皿に盛り付けたときは、皿の最初のものを布施した。このように、五つの最初の物の布施を捧げた。手に入ったものは、布施をせずに自分で消費することはなかった。それで、彼には〈五つの最初のものを布施する人〉という名前がつけられた。師は彼と彼の妻の婆羅門婦人に三つの道果（預流果、一來果、不還果）を得る機根があることを見通されて、婆羅門が食事をする頃に行き、門のところに立った。

婆羅門は門を背に家の中の方を向いてすわって食べていたので、師が門のところに立ったのを見なかった。しかし、彼の妻は夫に給仕しようとしたときに師を見て思った。「この婆羅門は五つの場合に最初のものを捧げてから食べている。ところが今、修行者ゴータマが去ろうとせずに、門のところに立っている。もし婆羅門が彼を見たら、自分の食事を持って行って布施するだろう。でも、私はもう一度、彼のために料理することはできないだろう」と。

婆羅門婦人は、「この人が修行者ゴータマを見ないように」と、師に背を向けて、夫の後ろから師を隠すようにして屈んで、満月を掌で隠そうとするかのように、立った。そのように立ったまま、「もう去っただろうか、まだおられるだろうか」と師を横目で見た。師は同じところに立ったままであった。婆羅門に声を聞かれるのを怖れて、「通り過ぎてください」とは言わなかった。後ろに下がってから、小声で「通り過ぎてください」と言った。師は「私は行きません」と頭を振られた。世間の師であるブッダが「私は行きません」と頭を横に振られたとき、彼女はこらえきれずに大声で笑った。

そのとき、師は家の中に向かって光明を放たれた。婆羅門は背を向けてすわっていたが、妻が笑った声を聞き、また六色の光明を見て、師に気づいた。ブッダたちというものは、人里であれ森であれ、理由があるときは、ご自身を見せずには去らないものである。婆羅門は師を見て、「妻よ、私は恥をかいた。おまえは王子さまがいらして門に立っても私に知らせないとは、ひどいことをしたものだ」と言って、半分食べた食事の皿を持って師のそばに行き、

「ゴータマさま、私は五つの場合に最初のものを布施してから自分も食べていました。今は半分に分けて、最初の半分の食事は食べてしまいましたが、この〔残りの〕半分の食事をお受け取りくださいませんか」と言った。師は、「あなたの食べ残しに用はない」とはおっしゃらずに、「婆羅門よ、最初のものも私には相応しく、真ん中で分けて食べた食事も、最後に食べ残した食事も、私には等しく相応しいものです。婆羅門よ、私たちは他人から与えられたもので生きる餓鬼に等しいのですから」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「最初のものから、中間のものから、あるいは残りのものから布施食を得て、他人の与えるもので生きる人が、褒める言葉もなく、あるいは蔑んで語ることもなければ、賢い人々は彼を聖者と言う。」と。

婆羅門はこれを聞いて心が晴れ晴れとして、「何と素晴らしいことだろう。世界の主という王子さまが『あなたの残した食べ物に用はない』と言わずに、このようにおっしゃったとは」と、門に立ったまま、師に質問をした。「ゴータマさま、あなたさまはご自分の弟子たちを『比丘』とお呼びになりますが、どういうものが『比丘』なのでしょうかと」。

師は、「どのような法話が彼には為になるだろうか」と思案されて、「この二人は、カッサパ仏の時代に、あらゆる名色(認識の対象)について語られているのを聴いた。名色のことを含めて彼らに法を説くのがよいだろう」とお考えになり、「婆羅門よ、名まえ(名)と形あるもの(色)に染まらず、執着せず、縛られないものが比丘というのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「367 何であれ名まえと形あるものに我がものという執着がなく、無いものに悲しむことがない、そのような人が比丘と呼ばれる。」と。

法話が終わったとき、夫婦は二人とも不還果に到達した。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.224 (2013 年 10 月) 托鉢と施しの文化 清らかな乞食とみじめな乞食 Qualified to receive alms.

367.Sabbaso nāmarūpasmim Yassa natthi mamāyitaṃ Asatā ca na socati Sa ve “bhikkhū”ti vuccati

367.あまねき名(ナーマ)と色(ルーパ)にも 我が物という思いなく 無所有(むしょう)を憂うこともなし げに彼こそは比丘と呼ばれる 訳: 江原通子

367. Sabbaso nāmarūpasmim, yassa natthi mamāyitaṃ; Asatā ca na socati, sa ve “bhikkhū”ti vuccati.

367.彼に、全てにあまねく、名前と形態(名色:現象世界)について、わがものと〔錯視〕されたもの(執着の対象)が存在しないなら、しかして、〔彼は〕所有するものがないので、〔もはや、何ものにも〕憂い悲しまず、彼は、まさに、「比丘」と呼ばれる。

≡Sn.956. (950) “Sabbaso nāmarūpasmim, yassa natthi mamāyitaṃ; Asatā ca na socati, sa ve loka na jiyati.956. (950) 彼に、全てにあまねく、名前と形態(名色:心と身体)について、わがものと〔錯視〕されたもの(執着の対象)が存在しないなら、そして、〔彼は〕所有するものがないので、〔もはや〕憂い悲しまず、彼は、まさに、世において、〔何も〕失いません。

サッパソー	ナーマルーパスミン	ヤッサ	ナッティ	ママーイタン
Sabbaso	nāmarūpasmim,	yassa	natthi	mamāyitaṃ;
彼に、全てにあまねく、名前と形態について、		存在しないなら、		わがものと[錯視]されたもの(執着の対象)が
Sabbaso/sabbadā(adv)[sabba-dā]一切時に、常に。 nāmarūpasmim=nāma/nāma(n)名-rūpa 名色 rūpasmim/rūpa(n.sg.loc)色,物質,肉体,形相,容姿,像,相,画,人形, yassa/ya(関代 m.sg.gen)[Sk.yah]~である人,~であるもの natthi=na/+atthi/atthi : ①(v.pr.3sg)[Sk.asti <as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在 mamāyitaṃ/mamāyita(a.n.sg.nom)←mamāyati(v.pp)[mama の denom]わがものとする,我所執をなす←mama 私に,の←aham(人代 sg.dat.gen)私;				

アサター	チャ	ナ	ソーチャティ	サ	ヴェー	ビクカー	ティ	ウツチャティ
Asatā	ca	na	socati,	sa	ve	“bhikkhū”	ti	vuccati.
[彼は]所有するものがないので、しかして、憂い悲しまず、彼は、まさに、「比丘」と呼ばれる。								
Asatā/asanta:=asat(a.n.sg.abl)不存の,不実の,不真の,不善の,愚悪の ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして na/socati/socati(v.pr.sg.3sg)[Sk.socati śuc]愁う,うれう,悲しむ, sa/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,その,彼女 ve/ve(adv)実に sa ve bālo ti vuccati 彼は実に愚者と言われる “bhikkhū/bhikkhu(m.pl.nom)[Sk.bhikṣu <bhikkhati]比丘,乞者,乞食者”ti/ti(ind)[iti の略]と,かく vuccati/vuccati:vuccate(v.pr.3sgd)[vac:pass]言われる。								

(25-7) Sambahulabhikkhuvatthu 大勢の比丘たちの物語 (5) — ソーナ長老と九百人の泥棒 368-376

◆ mettāvihārīti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto sambahule bhikkhū ārabba kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、大勢の比丘たちについて語られたものである。

あるとき、マハー・カッチャーナ尊者がアヴァンティ国のクルラガラ市の近くのバヴァッタ山に滞在していたとき、ソーナ・クーティカンナという在家信者がマハー・カッチャーナ長老の法話に心浄められて、長老のもとで出家したいと望んだ。

長老は、「ソーナよ、死ぬまで一日一食で、独りで住み、梵行(禁欲の行)を守るのは、大変なことです」と言って二度断ったが、ソーナは出家することにあまりにも熱意があったので、三度目に長老に懇願して出家を許され、南部地方は比丘が少なかったために〔沙弥として〕三年を過ごしたのち、〔諸所より十人の比丘を集めて〕具足戒を受けられ、師に直接会いたいと願って〔マハー・カッチャーナ〕和尚に頼み、和尚からことづかった伝言を持って旅を続けてジェータヴァナに行き、師を礼拝て、挨拶の言葉を交わした。

師から香房(ブツダの居室)で一緒に寝泊まりすることを許され、夜の大部分は露天で過ごし、真夜中に香房に入り、自分に割り当てられた寝床で夜の残りを過ごし、明け方に師に促されて十六節からなる『八の詩句の章』をすべて声を出して唱えた。すると、世尊は彼の読誦の終わりに称賛を与えて、「素晴らしい、素晴らしい、比丘よ」と褒め称えた。師が与えた称賛の声を聞いて、地に住む神々やナーガ、スパンナ(金翅鳥)から、上は梵天界の神々まで、一斉に称賛の声を上げた。

そのとき、ジェータヴァナから二千ヨージャナ離れたクルラガラ市で、長老の母である大在家信女の家に住む神霊も大きな声で称賛した。すると、在家信女が言った。「誰がこの称賛をしたのですか。」「私です、奥さま。」「あなたは誰ですか。」「あなたの家に住んでいる神霊です。」「あなたはこれまで私に称賛を与えなかったのに、今どうして与えたのですか。」「私はあなたに称賛を与えたものではありません。」「では、誰にあなたの称賛は与えられたのですか。」「あなたの息子のソーナ・クーティカンナ長老に与えたのです。」「

私の息子は何をしたのでしょうか。」「あなたの息子は今日、師と一緒に香房に泊まって師の法を唱えました。師はあなたの息子の法を聴いて喜ばれ、称賛を与えました。それで、私も彼に称賛を与えたのです。正しく覚られたお方の称賛を受けて、地に住む神々を始めとして梵天界の神々に至るまで、一斉に称賛の声を上げました。」「でも、神よ、どうして私の息子が師に法を語ったのですか。師が私の息子に語ったものではありませんか。」「あなたの息子が師に語ったのです」と、このように神霊に何度も語りかけられているうちに、在家信女に五種類の喜びが湧き起こり、体中に広がった。すると、彼女は考えた。「もし私の息子が師と一緒に一つの香房に泊まり、師に法を語ることができたなら、私にも語ることができるにちがいない。息子が戻ってきたときに聞法の会を開かせて、法話を聴こう」と。

ソーナ長老は師から称賛を与えられたので、「これは私の和尚さまから授けられた教えを伝えるべき時だ」と考え、世尊に、最も辺境の国々では持律師を含めた〔規定の十人より少ない〕五人の比丘サンガによる授成式ができることを始めとして、五つの願いを懇願し、数日、師のもとで過ごした後、「和尚さまに会いに行きます」と師に暇乞いをしてジェータヴァナ精舎から出発し、旅を続けて和尚のもとへ帰った。〔Vin.I. 5Cammakkhandaka 皮革鞆度 194-198〕

マハー・カッチャーナ長老は次の日、ソーナ長老を伴って托鉢に歩いているうちに、ソーナ長老の母である在家信女の家の門口に到った。母親は息子を見て喜び、礼拝して尊敬を込めて給仕してから訊ねた。「息子よ、あなたが師と一緒に一つの香房に住んで、師に法話を語った、というのはまことですか。」「在家信女よ、誰があなたにそれを話したのですか。」「息子よ、この家に住む神霊が大きな声で称賛を与えたので、私が『誰ですか』と言うと、『私です』と答えて、しかじか云々と話したのです。それを聞いて私は思いました。『もし私の息子が師に法を語ったのなら、私に対しても語るができるだろう』と。」「それから、彼女は息子に言った。「息子よ、あなたが師の面前で法を語ったのですから、私に対しても語るができるはずですよ。しかじかの日に聞法の会を開いて、あなたの法を聴きたいと思います。」「ソーナ長老は承諾した。

在家信女は比丘の群れに布施を捧げて供養し、「私の息子の法話を聴こう」と、奴隷女を一人、家の留守番のために残し、すべての親類縁者を連れて、市内に開法のために作られた仮屋で、飾り付けられた法座に上って法を説く息子の法話を聴くために出かけた。

ところがそのとき、九百人の泥棒たちが、その在家信女の家の隙をうかがって徘徊していた。しかし、彼女の家は七重の壁に囲まれ、七つの楼門があり、それぞれの場所に獰猛な犬たちが繋がれていた。家の中は屋根の水が落ちる場所に堀を堀って、鉛で満たされていた。それは、昼間は熱のために溶けて煮えているかのようであり、夜は固まって硬くなった。その内側は大きな鉄の柵が隙間もなく地面に立っていた。

と、このような防御と在家信女が家にいるがゆえに、その泥棒たちが隙を得られずにいたところ、その日は在家信女が出かけたことを知り、トンネルを掘って、鉛の堀と鉄柵の下を通して家に入り、「もし家の女主人が、我々がここにに入ったことを知って引き返して家に向かって来ようとするなら、刀で彼女を切って殺すように」と打ち合わせて、泥棒の頭を在家信女のもとに送った。

泥棒の頭は市内に行って、在家信女のそばに立った。泥棒たちは家の中で灯火を燃やして金貨の蔵の扉を開けた。留守番の奴隷女は泥棒たちを見て在家信女のもとへ走り、「奥さま、大勢の泥棒たちが家に入って金貨の蔵の扉を開けました」と知らせた。在家信女は、「泥棒たちに見つけた金貨を取らせなさい。私は我が息子の法話を聴きます、私の聞法の邪魔をしてはなりません。家に帰りなさい」と帰らせた。泥棒たちは金貨の蔵を空にしてから、銀の蔵の扉を開けた。奴隷女はまた女主人のもとへ行ってそのことを告げた。在家信女は、「泥棒たちに自分たちの欲しいだけのものを取らせなさい。私の邪魔をしてはなりません」と、ふたたび奴隷女を帰らせた。

泥棒たちは銀の蔵も空にすると、金の蔵の扉を開けた。奴隷女はまたもや行って在家信女に告げた。すると、在家信女は彼女を叱った。「本当におまえときたら、何度も私のところへ来ますね。『泥棒たちには好きなだけ盗ませなさい。私は我が息子の法話を聴いているのです。私の邪魔をしてはなりません』と私が言っても、私の言葉に従わずに何度も何度もやってきます。もしまた来るなら、私はあなたをどうすべきか知っています。家に帰りなさい」と言って帰らせた。

泥棒の頭は彼女の語ることを聞いて、「このような女の所有物を盗む者たちには、雷が落ちて頭が割れるだろう」と思い、泥棒たちのもとへ行って、「急いで在家信女の持ち物を元通りにせよ」と命じた。泥棒たちは、金貨は金貨の蔵へ、銀と金は銀の蔵と金の蔵へと、ふたたび満ちた。

彼女が法を尊ぶさまはこのようであったそうで、法は法を行うものを守るのである。それゆえ、こう言われている。「法はたしかに法を行うものを守る、よく行われた法は安樂をもたらす、よく行われた法に巧徳はある、法を行うものは悪い境遇に赴かない。」と。

泥棒たちは行って、聞法の場所に立った。ソーナ長老は法を語り、夜が開けると座から下りた。そのとき、泥棒の頭は在家信女の足元にひれ伏して、「奥様、私をお赦しください」と言った。「旦那さま、どういうことですか。」「私はあなたさまに危害を加えて殺そうと思って立っていました。」「それならばあなたを赦しましょう。」「残りの泥棒たちも同じように言って、「みなさん、赦します」と言われると、「奥さま、私たちをお赦しくださるなら、あなたさまの息子さんのもとで私たちを出家させてください」と言った。在家信女は息子を礼拝して言った。「息子よ、この泥棒たちは私の徳とあなたさまの法話に心浄められ、出家を願っています。彼らを出家させてください」

長老は「いいでしょう」と言って、泥棒たちが着ていた衣の裾を切らせて銅色の泥で染めさせて、彼らを出家させ、戒律をしっかりと身につけさせた。具足戒を授けたときには、彼らの一人一人にそれぞれ別々の瞑想の主題を与えた。彼ら九百人の比丘たちは、それぞれ別々の九百の瞑想の主題を授かって一つの山に登り、それぞれの木の陰にすわって修行者の勤め(内観)を行った。師は二千ヨージャナ離れたジェータヴァナ大精舎にすわられたまま、これらの比丘たちを観察されて、彼らの行いに応じて法話を選び、光明を送って彼らの面前にすわって説いておられるかのように、次の詩句を唱えられた。

「368 慈しみに住む比丘は、ブッダの教えに心浄め、寂靜の境地を達成する、心の作用が静まった至福の境地を。」「369 比丘よ、この船から水を汲み出せ、水が汲み出されたら軽やかに進む。愛着と憎しみを断ち切って、そこからあなたは涅槃に赴く。」「370 五つ〔の感官の束縛〕を断ち切れ、五つ〔の束縛〕を捨てよ、五つのより良いことを修習せよ。五つの執着を乗り越えた比丘は、激流を渡った者と言われる。」「371 瞑想せよ、比丘よ、怠るな、あなたの心を欲望の対象に動かすな、怠って〔熱せられた〕鉄の玉を呑み込むな、焼かれながらこれは苦だと泣き叫ぶな。」「372 智慧のない者に瞑想はない、瞑想しない者に智慧はない、瞑想と智慧のある者、その人は涅槃の近くにある。」「373 空の家に独り入り、心は静まり、正しく法を觀ずる比丘には、人間を超えた楽しみがある。」「374 諸々の要素の生起と消滅を、いたるところでよく理解する者は、その不死の境地をわきまえた人々の喜悅歡喜を獲得する。」「375 この世で智慧ある比丘にとって、ここでこれは第一のことである。感官が制御され、満足し、諸々の戒律により身を慎み、淨らかな生活をして倦むことがない善い友に仕えよ。」「376 親かな振る舞いをせよ、行いが巧みであれ。そうすれば喜びが多く、苦を終わらせるであろう。」と。

このように師によって説かれたこれらの詩句の一つ一つの終わりに、百人ずつの比丘が、それぞれすわった場所で、無碍解とともに阿羅漢果に到達し、空中に飛び上がり、これらの比丘たちすべてが空を飛んで二千ヨージャナの遠い距離を過ぎて、如来の金色のお身体を褒め称えながら、礼拝した。

No.225 (2013 年 11 月) 慈しみに涅槃の関係 慈しみの二重構造 Liberation through compassion.

368.Mettāvihārī yo bhikkhu Pasanno buddhasāsane Adhigacche padam santam Sankhārūpasamam sukham

368.慈悲に住して淨信を ブッダの教えに捧ぐもの 現象すべてしづまれる 安樂の境に到るらん 訳：江原通子

仏の教えに心清まり (ブッダの教えは真理であると納得しているだけではなく、納得することと同時に心が清らかにもなっているのです。)

慈しみに住む比丘は (心も体も「慈しみ漬け」というような生き方になるのです。)

諸行の寂滅 (諸行とは、一切の現象のことです。現象を認識すると、心の中に様々な概念が起きます。概念と同時に、貪瞋痴の感情が起きて渦を巻きます。諸行は無常であるとわかると、概念は起きません。感情の渦巻きは消えます。)、安樂なる 寂靜の境を得るであろう (和訳：片山一良『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版 443p)

368. Mettāvihārī yo bhikkhu, pasanno buddhasāsane; Adhigacche padam santam, saṅkhārūpasamam sukham.

368.彼が、慈愛〔の心〕で〔世に〕住む比丘であり、覺者の教えに清らかな信ある〔比丘〕であるなら、〔彼は〕寂靜の境地に到達するであろうー形成〔作用〕 (行：生の輪廻を施設し造作する働き) の寂止という安樂〔の境地〕に。

メッタヴィハーリー	ヨー	ビク	パサンノー	ブッダサーサネー
Mettāvihārī	yo	bhikkhu,	pasanno	buddhasāsane;
慈愛〔の心〕で〔世に〕住む	彼が、	比丘であり、	清らかな信ある〔比丘〕であるなら、	覺者の教えに
Mettāvihārī=mettā/metā(f 依処)[Sk.maitrī,BSk.maitrā,maitryā]慈,慈悲+vihārī/vihārin(a.m.sg.nom)[vihāra-in]住者,住ある yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人,~であるもの bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘,乞者,乞食者,				
pasanno/pasanna(a.m.sg.nom)←pasīdati(v.pp)[pa-sad]淨まる,喜ぶ,信する buddhasāsane=buddha/buddha(a.m 依属)[bujjhati(v.pp)]				
覺った,目覚めたる,覺知せる;覺者,仏陀,仏-sāsana 仏教+sāsane/sāsana(n)[Sk.sāsana<sās]教,教説; 信書,使書,通牒;				

アディガッチェー	パダン	サンタン	サンカールーパサマン	スカン
Adhigacche	padam	santam,	saṅkhārūpasamam	sukham.
〔彼は〕到達するであろう	境地に	寂靜の	形成〔作用〕の寂止という	安樂〔の境地〕に。
Adhigacche/adhigacchati(v.opt.3sg)[adhi-gam]到達す,証得す padam/pada(n.sg.acc)足;足跡,歩;句,語法 santam/santa: ①(a.n.sg.acc)[sammati ①sam:pp]寂靜の,寂止の,寂者②(a)[sammati ②śram:pp.]疲れた,疲労の③(a)[=sant,sat as:ppr]ありつつ,現存の;善き,正しき,善人←sammati: ①(v.pp)[Sk.samyati śam ①]靜まる,寂止す,休息す,住む②(v)[Sk.sāmyati śram]疲れる③(v)[Sk.samyati śam ②]働く,満足する④(f)[=sammuti<sam-man]-nāṇa 世俗智, saṅkhārūpasamam=sāṅkhāra/sāṅkhāra(m 依属)[Sk.BSk.samskāra<sam-kṛ]行,為作,(行為とその習慣力),形成力,現象+upasamam/upasama(m.sg.acc)[Sk.upāsama]寂靜,寂止,休息,止息				
sukham/sukha(a.n.sg.acc)[〃]樂,安樂,幸福。				

No.226 (2013 年 12 月) ひとが持って生まれる能力 毒にも薬にもなる思考 Think with caution.

369.Siñca bhikkhu imaṃ nāvaṃ, sittā te lahumessati; Chetvā rāgañca dosaṇca, Tato nibbānamehisi.

369.この舟の水を汲めかし いざ比丘よ 汲まば舟足 軽からん 貪り瞋りを捨てて疾(と)く 汝(なれ)は涅槃(さと)りに至らな
ん 訳: 江原通子

369. Siñca bhikkhu imaṃ nāvaṃ, sittā te lahumessati; Chetvā rāgañca dosaṇca, tato nibbānamehisi.

369.比丘よ、この舟〔の水〕を汲み出せ。あなたが〔水を〕汲み出したなら、〔舟は〕軽やかに行くであろう。貪欲と憤怒とを断ち切って、そののち、〔あなたは〕涅槃に行くであろう。

スインチャ ビック イマン ナーワン スイッター テー ラフメッサティ

Siñca bhikkhu imaṃ nāvaṃ, sittā te lahumessati;

汲み出せ。比丘よ、この舟〔の水〕を [水を]汲み出したなら、あなたが [舟は]軽やかに行くであろう。

Siñca/siñcati(v.imper.2sg)[sic]注ぐ,舟の水を汲み出す bhikkhu/bhikkhu(m.sg.voc)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘,乞者,乞食者 imaṃ/ima(指代 f.sg.acc)これ nāvaṃ/nāvā(f.sg.acc)[Sk.nau,nāvā]船,舟, sittā/sittā(a.f.sg.nom)←siñcati(v.pp)[sic]注ぐ,舟の水を汲み出す te/ta(人指示代 m.pl.nom)彼,その,彼女 lahumessati=lahum/lahu(a.n.sg.acc.adv)[Sk.laghu,raghu]軽き,疾き+essati/eti(v.fut.3sg)[i]行く

チェートウワー ラーガンチャ ドーサンチャ タトー ニッバーナメーヒスイ

Chetvā rāgañca dosaṇca, tato nibbānamehisi.

断ち切って、貪欲と 憤怒とを そののち、 [あなたは]涅槃に行くであろう。

Chetvā/chetvā(ger)←chindati(v.ger)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す rāgañca=rāgañ/rāga(m.sg.acc)[// cf.rajati]貪,貪欲,染;染色,色彩+ca/ca(conj)〜と,また,しかし,〜も,そして dosaṇca=dosañ/dosa: ①(m)[Sk.doṣa]過惡,過失,欠点,病素②(m.sg.acc)[Sk.dveṣa]瞋,瞋恚+ca/, tato/tato[ta]abl]そこから;それより,それ故に,その後 nibbānamehisi=nibbānam/nibbāna(n.sg.acc)涅槃,寂滅 +ehisi/eti(v.fut.2sg)[i]行く。

No.227 (2014 年 1 月) ブッダの脱獄計画 秘密の鍵は「観察」です Jailbreak of suffering.

370.Pañca chinde pañca jahe Pañca cattari bhāvaye Pañcasangātigo bhikkhu Oghatinnoti vuccati

370.五①を断ち 五②を捨て 五③を修せ 五者④を超えし その比丘は 「暴流を渡れる」者と言われる 訳: 江原通子

: ① 欲界五種の煩惱 ② 色界・無色界の五煩惱 ③ 信・勤・念・定・慧の五根 ④ 貪・瞋・痴・慢・見の五著

370. Pañca chinde pañca jahe, pañca cattari bhāvaye; Pañca saṅgātigo bhikkhu, “oghatinno”ti vuccati.

370.五つ〔の束縛するもの〕(修行者を欲界に縛る五つの束縛)を断つように。五つ〔の束縛するもの〕(修行者を色界と無色界に縛る五つの束縛)を捨棄するように。かつまた、くわえて、五つ〔の機能〕(信・精進・気づき・心の統一・智慧)を修めるように。五つの執着(貪欲・憤怒・迷妄・思量・見解)を超え行く比丘は、「激流を超え渡った者」と呼ばれる。

パンチャ チンデー パンチャ ジャヘー パンチャ チュッタリ バワイエー

Pañca chinde pañca jahe, pañca cattari bhāvaye;

五つ〔五下分結〕を断つ。五つ〔五上分結〕を 捨棄。五つ〔信・勤・念・定・智慧=五根〕を また、くわえて、 修める。

Pañca/pañca(num.a.pl.acc)[// 五 chinde/chindati(v)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す pañca/ jahe/jahe

(opt.3sg)←jahāti;jahati(v.opt)[// hā]捨つ,断ず, pañca/ cattari=ca/ca(conj)〜と,また,しかし,〜も,そして +uttari/uttari(a.m.sg.nom)[cf.uttara]より上の,超えたる bhāvaye/bhāvaye(opt.3sg)←bhāveti(v.opt)[bhāveti bhū: caus]あらしむ,修習す,修す [increases;cultivates;develops 増加する;耕す;発展させる];

パンチャ サンガーティゴ

Pañca saṅgātigo

五つの 執着(欲・怒り/痴・慢・見=十結のまとめ)を超え行く 比丘は、 「激流を超え渡った者」と 呼ばれる。

Pañca/ pañca(num.帯)[// 五 saṅgātigo=sanḅa/saṅga(m.依対)[<sañj]着,染着,執着-ātiga 執着を越えたる者(=阿羅漢)

+atigo/atiga(a.m.sg.nom)[ati-ga]超えたる,打ち勝てる bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘,乞者,乞食者,

“oghatinno=ogha/ogha(m.依対)[// 暴流,流,洪水-ātigam,-tinna 暴流を越えたる,暴流を渡れる+tiṇṇo/tinṇa(a.m.sg.nom)←tarati:

Q(v.pp)[// tr]渡る,度脱す,こえる,横切る②(v)[Sk.tvarate tvar cf.turati,turayati]急ぐ”ti/ vuccati/vuccati:vuccate(v.pr.3sgd)[vac:pass]言われる。

No.228 (2014年2月) 生きているのに生きることを知らない 生きるとは感覚依存症です Addiction to six senses is called life
 371.Jhāya bhikkhu mā pamādo Mā te kāmaguṇe bhamassu cittaṃ Mā lohaguḷaṃ gilī pamatto Mā kandi “dukkhamida”nti dayhamāno
 371.禅定修せ いざや比丘 放逸なることなかるべし ころそ愛欲(カーマ)に迷わすな 放逸にして墮地獄し 熱鉄丸を呑むなか
 れ 業火に焼かるその時に「む、苦」と叫ぶこと勿れ 訳：江原通子
 371.比丘よ、禅をせよ、怠けるな そなたの心を欲に喜ばせるな 怠けて鉄の玉を飲むな 焼かれて「これは苦しい」と叫ぶ
 な訳：片山一良『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版,2009

371. Jhāya bhikkhu [jhāya tuvaṃ bhikkhu (?)] mā pamādo [mā ca pamādo (sī. syā. pī.)], mā te kāmaguṇe ramessu [bhamassu (sī. pī.), bhavassu (syā.), ramassu (ka.)] cittaṃ; Mā lohaguḷaṃ gilī pamatto, mā kandi “dukkhamida”nti dayhamāno.

371. 比丘よ、瞑想せよ。〔気づきを〕怠ること(放逸)があつてはならない。欲望の対象(妙欲)に、あなたの心を喜ばせることがあつてはならない。怠る者となり、銅の玉を飲み込んではいならない。〔欲の炎に〕焼かれる者となり、「これは、苦しみだ」と泣き叫んではならない。

ジャーヤ ビック マー チャ パマードー マー テー カーマグネー バマッス チットン
 Jhāya bhikkhu mā ca pamādo, mā te kāmaguṇe bhamassu cittaṃ;
 瞑想せよ。比丘よ、怠ることがあつてはならない。あなたの 欲望の対象に、迷わすことがあつてはならない。心を
 Jhāya/jhāyati : ①(v.imper.2sg)[Sk.dhyāyati dhyai] 静慮す,禅定をなす,思念す②(v)[Sk.kṣāyati kṣai]燃える,引火す,焼ける,消尽す
 bhikkhu/ mā/ ca/ pamādo/pamāda(m)[<pa-mad Sk.pramāda]放逸-tthāna 放逸処,放逸の原因, mā/ te/ tvam:tumha(人代.sg.gen)汝,あ
 なた kāmaguṇe=kāma/kāma(m.n 依属)欲,愛欲,欲念,欲情,欲楽+guṇe/guṇa(m.pl.accc)[/] : ①徳,功德②絃,いと③重,種,種類 pañca
 kāma-guṇa 五種欲④木(の心喰い)虫-pānaka 木虫 bhamassu/bhamati(v.imper 反射態 2sg)[bhram]迷走す,うろつく,彷徨す
 する cittaṃ/citta : ①=citra(a)[Sk.citra <ci]種々の,雑種の②(n.sg.acc)[/ <cinteti cit]心③=citra(a)[cf.Sk.caitra]月の名[3月-4月];

マー ローハグラン ギリー パマットー マー カンディ ドウッカミダンティ ダヤマーノー
 Mā lohaguḷaṃ gilī pamatto, mā kandi dukkhamidaṇṭi dayhamāno.
 銅の玉を 飲み込んではいならない。怠る者となり、泣き叫んではならない。「これは、苦しみだ」と焼かれる者となり、
 Mā lohaguḷaṃ=loha/loha(n 依属)[/]金属,銅-guḷa 銅丸,鉄丸+guḷaṃ/guḷa(m.sg.acc)[Sk. guḍa] : ①玉,球②砂糖,糖③房群,鎖④糸
 玉 gili/gilati(v.aor.2sg)[Sk.girati,gilati gir]嚙下す,のむ,貪食す pamatto/pamatta(a.m.sg.nom)[pamajjati <mad の pp]放逸なる,放縱
 の,我儘の, mā/ kandi/kandati(v.aor.2sg)[Sk.krandati krand]泣く,悲泣す,号泣す “dukkhamida=dukkham/dukkha(a.n.sg.nom)苦,苦
 痛,苦悩+ida”n/ima(指代 n.sg.nom)これ+ti/ti(ind)[iti の 略]と,かく dayhamāno/dayhamāna(a.m.sg.nom)←dayhati(v.ppr)[dahati の
 pass]焼かれる,茶毘に付す←dahati:,dahati(v)[Sk.dahati dah]焼く,苦しめる

No.229 (2014年3月) 輪廻は激流です 生きるとは感覚依存症です Buddha's path leads to perfect calmness.

372.Natthi jhānaṃ apaññassa Paññā natthi ajhāyato Yamhi jhānañca paññā ca Sa ve nibbānasantike.
 373.Suññagāraṃ pavitthassa Santacittassa bhikkhuno Amānusi rati hoti Sammā dhammaṃ vipassato.
 374.Yato yato sammasati khandhānaṃ udayabbayaṃ Labhati pītipāmojjaṃ amataṃ taṃ vijānataṃ
 375.Tatrāyamaḍi bhavati Idha paññassa bhikkhuno Indriyagutti santutthi Pātimokkhe ca samvaro.
 372 智慧なきものに定(じょう)はなく,定なきものに智慧ぞなき,定と智慧とを具えなば,実(げ)にこそ近し,涅槃(ニッバーナ)
 373 比丘空閑の室に入り 独り心はしづやかに 正しく法を観ずれば 人界になき喜得る
 374 もしも人 五種なる蘊の消滅を 瞬時瞬時に覚知せば 彼は必ず得るならん 不死の喜得と充足を 訳：江原通子
 375 ここにおける智慧ある比丘には これがそのうちの初めなり すなわち感官の防護、知足 根本戒(パーティモッカ)によ
 る防護なり 訳：片山一良『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版,2009

372. Natthi jhānaṃ apaññassa, paññā natthi ajhāyato [ajjhāyino (ka.)]; Yamhi jhānañca paññā ca, sa ve nibbānasantike.

372.智慧なき者に、瞑想(禅・静慮：禅定の境地)は存在しない。瞑想なき者に、智慧は存在しない。彼において、しかして、
 瞑想があり、かつまた、智慧があるなら、彼は、まさに、涅槃の現前にある。

ナットィ ジャーナン アパンニャッサ パンニャー ナットィ アジャーヤトー
 Natthi jhānaṃ apaññassa, paññā natthi ajhāyato;
 瞑想は存在しない。 智慧なき者に、 智慧は存在しない。 瞑想なき者に、
 Natthi=na/+atthi/atthi : ①(v.pr.3sg)[Sk.asti <as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在 jhānaṃ/jhāna : ①(n.sg.nom)[Sk.dhyāna.cf.jhāyati
 ①]禅,静慮②(n)[<jhāyati ②]大火,火事 apaññassa/apañña(a.m.sg.gen)智慧なき, paññā/pañña(f.sg.nom)[Sk.prajñā.cf.pajānāti]般若,慧.
 智慧 natthi=na/+atthi/ ajhāyato=a/+jhāyato/jhāyanta(m.sg.gen)←jhāyati : ①(v.ppr)[Sk.dhyāyati dhyai]静慮す,禅定をなす,思念す②
 (v)[Sk.kṣāyati kṣai]燃える,引火す,焼ける,消尽す;

ヤンヒ ジャーナンチャ パンニャー チャ サ ヴェー ニッバーナサンティケー
 Yamhi jhānañca paññā ca, sa ve nibbānasantike.
 彼において、しかして、瞑想があり、かつまた、智慧があるなら、 彼は、まさに、 涅槃の現前にある。
 Yamhi/ya(関代 m.sg.loc)[Sk.yah]〜である人,〜であるもの jhānañca=jhānañ/+ca/ paññā/ ca/, sa/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,その,彼
 女 ve/ve(adv)実に sa ve bālo ti vuccati 彼は実に愚者と言われる nibbānasantike=nibbāna/nibbāna(n 依属)涅槃,寂滅
 +santike/santika(n.sg.loc)[sa-antika,BSk. /]付近,面前

373. Suññāgāraṃ pavīṭṭhassa, santacittassa bhikkhuno; Amānusi rati hoti, sammā dhammaṃ vipassato.

373. [人のいない] 空家に入り、心が寂静となった比丘が、法（事象）を正しく [あるがままに] 観察していると、人間ならざる喜びが有る（世俗の喜びを超えた喜びが生起する）。

スニャーガーラン	パヴィッタッサ	サンタチッタッサ	ビクノー
Suññāgāraṃ	pavīṭṭhassa,	santacittassa	bhikkhuno;
[人のいない] 空家に	入り、	心が寂静となった	比丘が、

Suññāgāraṃ=**Suñña**/suñña(a.n 持)空なる、空無の、空-āgāra 空屋、空閑処、空処+**agāraṃ**/agāra(n.sg.acc)家、舎、家屋、俗家
pavīṭṭhassa/pavīṭṭha(m.sg.gen)←pavisati(v.pp)[pa-viś]入る、**santacittassa**=**santa**/santa: ①(a 有持)[sammati ①sam:pp]寂静の、寂止の、寂者②(a)[sammati ②sram:pp.]疲れた、疲労の③(a)[=sant,sat as:ppr]ありつつ、現存の;善き、正しき、善人+cittassa/citta: ①=citra(a)[Sk.citra < ci]種々の、雑種の②(n→m.sg.gen)[// <cinteti cit]心③=citra(a)[cf.Sk.caitra]月の名[3月-4月]
bhikkhuno/bhikkhu(m.sg/gen)[Sk.bhikṣu < bhikkhati]比丘、乞者、乞食者;

アーマヌシー	ラティ	ホーティ	サンマー	ダンマン	ヴィパッサター
Amānusi	rati	hoti,	sammā	dhammaṃ	vipassato.
人間ならざる	喜びが	有る。	正しく [あるがままに]	法（事象）を	観察していると、

Amānusi/amānusa(a),amānusi(f.sg.nom)[a-mānusa,Sk.amānusa]非人の、鬼神の **rati**/rati(f.sg.nom)[// <ram]楽、喜楽
hoti/bhavati(v.pr.3sg)[bhū] ある、存在する、**sammā**/sammā: ①(adv)[Sk.samyak]正しく、完全に②[samma ①の pl] 友等よ
dhammaṃ/dhamma(m.n.sg.acc)法、教法、真理、正義 **vipassato**/vipassanta(a.m.sg.gen)←vipassati(v.ppr)[vi-passati < paś]観察す、観法をなす

374. Yato yato sammasati, khandhānaṃ udayabbayaṃ; Labhati [labhati (pī.), labhate (ka.)] pītipāmojjaṃ, amataṃ taṃ vijānataṃ.

374. [心身を構成する五つの] 範疇（蘊）の生滅を [時々刻々に] 触知する、そのたびごとに、[身体の在り方をあるがままに] 識知している者たちの、[まさに] その、不死なる喜悦と歓喜を、[彼は] 得る。

ヤト	ヤト	サンマサティ	カンダーナン	ウダヤッパヤン
Yato	yato	sammasati,	khandhānaṃ	udayabbayaṃ;
そのたびごとに、	[時々刻々に]	触知する、	[心身を構成する五つの]	範疇（蘊）の

Yato/yato(adv)[ya:abl]そこから、なるが故に、何となれば **yato**/ **sammasati**/sammasati(v.pr.3sg)[sam-mrś]触る、把触す、触知す、思惟す、**khandhānaṃ**/khandha(m.pl.gen)[Sk.skandha]蘊、あつまり、肩、幹 **udayabbayaṃ**=**udaya**/udaya(m 相)[ud-aya < i]生起、興起、利息-bbaya,-vyaya 生滅、興衰。 +b/+**bayaṃ**/vaya: ①(n)[=vayo,Sk.vayas]時量、年代[青年、壮年、老年]、青春②(m.sg.acc)[Sk.vyaya]衰、衰滅、消亡、壊;

ラバティ	ピーティパーモッジャン	アマタン	タン	ヴィジャーナタン
Labhati	pītipāmojjaṃ,	amataṃ	taṃ	vijānataṃ.
[彼は] 得る。喜悦と歓喜を、		不死なる	[まさに] その、	識知している者たちの、

Labhati/labhati(v.pr.3sg)[labh]得る **pītipāmojjaṃ**=**pīti**/pīti(f 相)[Sk.pīti]喜、喜悦-pāmojja 喜悦+**pāmojjaṃ**/pāmuja(n.sg.acc)[pa-mudの grd]=pāmojja 悦、喜悦、勝喜、欣悦←pamodati(v.grd)[pa-mud]喜ぶ、満足する、**amataṃ**/amata(a.n.sg.acc)[a-mata,Sk. amṛta]不死の、不死、甘露、涅槃 **taṃ**/ta(人指示代 n.sg.acc)彼、その、彼女 **vijānataṃ**/vijānanta(m.pl.gen)←vijānāti(v.ppr)[// vi-jñā]了知す、了別す、識知。

375. Tatrāyamādi bhavati, idha paññassa bhikkhuno; Indriyagutti santutṭhi, pātimokkhe ca saṃvaro.

375.そこで、このことは、ここに、智慧ある比丘にとって、最初 [に為すべきこと] と成る。[感官の] 機能（根）を守る者となり、[欲を貪らない] 知足の者となり、しかして、戒条（波羅提木叉：戒律条項）において [自己を] 統御する者となり—

タトウラーヤマーディ	バワティ	イダ	パンニャッサ	ビクノー
Tatrāyamādi	bhavati,	idha	paññassa	bhikkhuno;
そこで、このことは、最初		ここに、	智慧ある比丘にとって、	

Tatrāyamādi=**tatra**/tatra:tattha(adv)[Sk.tatra]そこに、そこで、そのとき+**ayam**/ima(指代 m.sg.nom)これ+**ādi**/ādi(m,n.sg.nom)[//]最初、初、等 **bhavati**/bhavati(v.pr.3sg)[bhū] ある、存在する、**idha**/idha,idham(adv)[Sk.iha]ここに、此界に **paññassa**/pañña(a→m.sg.gen)[paññaの形容詞形]慧ある、かしこき、智慧者 **bhikkhuno**/bhikkhu(m.sg.gen)[Sk.bhikṣu < bhikkhati]比丘、乞者、乞食者;

インドウリヤグッティ	サントウッティ	パーティモクケー	チャ	サンワロー
Indriyagutti	santutṭhi,	pātimokkhe	ca	saṃvaro.
感官の機能を守る者となり、	知足の者となり、	戒条において、	しかして	[自己を] 統御する者となり

Indriyagutti=**indriya**/indriya(n 依属)[// indra-īya]根、感官、感覚知覚等の能力+**gutti**/gutti(f.sg.nom)[Sk.guṇi < guṇ]守護、保護
santutṭhi/santutṭhi(f.sg.nom)[sam-tutṭhi]知足、喜足、満足、**pātimokkhe**/pātimokkha:pātimokkha(n.sg.loc)[cf.paṭimokkha,BSk.prātimokṣa]「完全に防護する」波羅提木叉、戒、戒条、戒本、別解脱-saṃvara 別解脱律儀 **ca**/saṃvaro/saṃvara(m.sg.nom)[<saṃvarati]防護、律儀、摂護←saṃvarati(v)[saṃ-vr]防護す、制御す←saṃ-(pref)[// =sam]共に、正しく、集まる、同じ√vrt [動1(反)] 回る、転がる、ある、起こる、存在する、～である、～になる。

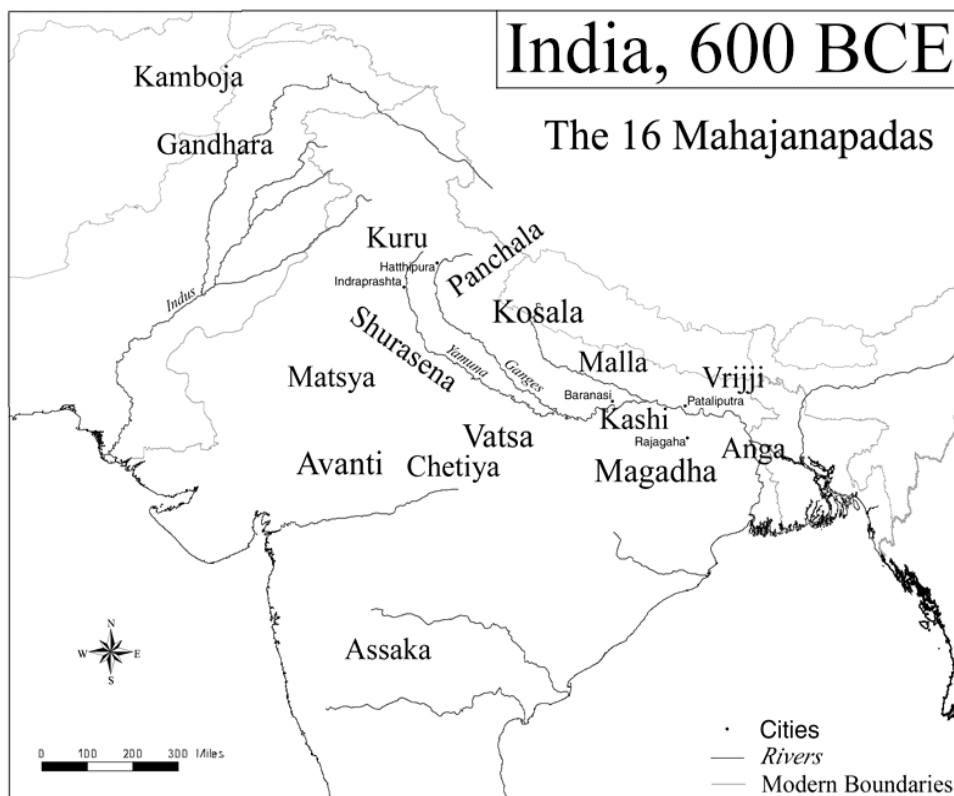
No.230 (2014 年 4 月) 簡単に見える超越した世界 仏道は完全に説かれています This simple path breaks all mundane barriers.
 376.Mitte bhajassu kalyāṇe, Suddhājīve atandite; Paṭisanthāravutyassa; Ācāra kusalo siyā, Tato pāmojjabahulo, Dukkha santam karissati.
 376.生活清く、倦(う)むことのない 善き友らとそなたは交われ 親しく迎える者となり 所行の巧者となるならば それより かれは喜びに満ち 苦の終わりを作るであろう 訳: 片山一良『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版,2009

376. Mitte bhajassu kalyāṇe, suddhājīve atandite; Paṭisanthāravutyassa [paṭisandhāravutyassa (ka.)], ācāra kusalo siyā; Tato pāmojjabahulo, dukkhassantam karissati.
 376.休むことなく〔励み〕清浄の生き方ある、善き朋友たちと親しくせよ。友愛の生活ある者として存し、〔正しい〕行ないに巧みな智ある者として存するなら、そののち、歓喜多き者となり、苦しみの終極を為すであろう。

ミッター バジャッス カルヤーネー スッダージーヴェー アタンディテー
 Mitte bhajassu kalyāṇe, suddhājīve atandite;
 朋友たちと 親しくせよ。 善き 清浄の生き方ある、 休むことなく〔励み〕
 Mitte/mitta(m.n.pl.acc)[Sk.mitra]友,友人,朋友 bhajassu/bhajati(v.imper.反照態 2sg)[bhaj]親近す,奉仕す
 kalyāṇe/kalyāṇa:, kallāṇa(a.m.pl.acc)[Sk.kalyāṇa]善き,善良の,善巧なる-mitta 善知識,善友,良友, suddhājīve=suddha/suddha(a 有持)
 [sujjhati:pp]淨き,清浄の,純粹の+ājīve/ājīva(m.pl.acc)[// ā-jīva]活命,命,生活 atandite/atandita(a.m.pl.acc)[a-tandita]倦怠なき,活動
 的な,努力する←tandita(a)[tandeti の pp]倦怠の,懶惰の←tandeti(denominative.v)倦怠する,懶惰する←tandi(f)[Sk.tandī]倦怠,懶
 惰;

パティサンターラウトウヤッサ アーチャーラクサロー スィヤー
 Paṭisanthāravutyassa, ācāra kusalo siyā;
 友愛の生活ある者として存し、 〔正しい〕行ないに巧みな智ある者として 存するなら、
 Paṭisanthāravutyassa=paṭisanthāra/paṭisanthāra(m 有属)[cf.paṭisantharati]歓迎,承迎,挨拶,友情,親しさ←paṭisantharati(v)[paṭi-sam-
 str]歓迎する,親しく受ける+vuty/vutti(f)[Sk.vṛtti]行為,生活,慣習+assa/atthi: ①(v.opt.3sg)[Sk.asti<as]ある,存在する②[Sk.asti]
 有,存在, ācāra kusalo=ācāra/ācāra(m 依処)[<ā-car]行,正行,淨行-kusala 淨行に巧みな+kusalo/kusala(a.m.sg.nom)善き,善業,巧みな,
 善巧 siyā/atthi: ①(v.opt.3sg)[Sk.asti<as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在;

タトー パーモッジャバフロー ドウッカッサンタン カリッサティ
 Tato pāmojjabahulo, dukkhassantam karissati.
 そののち、 歓喜多き者となり、 苦しみの終極を 為すであろう。
 Tato/tato[ta の abl]そこから;それより,それ故に,その後 pāmojjabahulo=pāmojja/pāmujja(n 有持)[pa-mud の grd]=pāmojja 悦,喜悦,
 勝喜,欣悦+bahulo/bahula(a.m.sg.nom)[bahu-la]多く,多数,富める,熱心な,屢々の, dukkhassantam/dukkhassanta(m.sg.acc)
 [dukkhassa-anta]苦の辺際,苦の終焉 karissati/karoti(v.fut.3sg)[kr]なす,行う,作る。



(25-8) Pañcasatabhikkhuvatthu 五百人の比丘たちの物語(3) — ジャスミンの花が落ちるのに縁を得て修行に励んだ比丘たち 377

◆ vassikā viya pupphānīti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto pañcasate bhikkhū ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、五百人の比丘たちについて語られたものである。

彼らは師のもとで瞑想の主題をいただいて、森林で修行者の勤め(内観)を行っていたが、朝早くジャスミンの花が咲き夕方に花茎から落ちるのを見て、「花々が茎から落ちて自由になるように、私たちはまず出来るだけ早く執着から自らを解放しよう“pupphānaṃ vaṇṭehi mucanato mayaṃ paṭhamataraṃ rāgādīhi mucissāmā”ti」と努力した。

師はこれらの比丘を観察されて、「比丘たちよ、比丘というのは茎から落ちる花のように、〔輪廻の〕苦からの解放に努力するべきです bhikkhave, bhikkhunā nāma vaṇṭato mucanapupphena viya dukkhato muccitum vāyamitabbamevā」とおっしゃって、香房(ブツダの居室)にすわられたまま光明を放たれて、〔彼らの面前に姿を見せて〕次の詩句を唱えられた。「377 ジャスミンが萎れた花を解き放ち落とすように、そのように比丘たちは執着と憎しみを完全に解き放て。」と。

法話が終わったとき、彼らすべての比丘たちは阿羅漢果に確実に立った。

No.231 (2014年5月) ウェーサーカとは花まつり 花はこころを真理に目覚めさせる Beauty reveals evanescence.

377.Vassikā viya pupphāni, Maddavāni pamuñcati; Evaṃ rāgañca dosaṇca, Vippamuñcetha bhikkhavo.

377.萎れし花を散り落とす バッシカー草※のごとくにも 貪り瞋りを捨てよ 比丘たち ※ジャスミン 訳:江原通子

377. Vassikā viya pupphāni, maddavāni [majjavāni (ka. ṭikā) paccavāni (ka. aṭṭha.))] pamuñcati; Evaṃ rāgañca dosaṇca, vippamuñcetha bhikkhavo.

377.ウアシカー (ジャスミン) が、萎れた花々を解き放つ (落とす) ように、比丘たちよ、このように、貪欲と憤怒とを解き放つのだ。

ワッスィカー	ヴィヤ	プッパーニ	マッダワーニ	パムンチャティ
Vassikā	viya	pupphāni,	maddavāni	pamuñcati;
ウアシカーが、	ように、	花々を	萎れた	解き放つ (落とす)

Vassikā/vassikā:vassika(f.n.sg.nom)vassikī(f)夏生花,素馨,ジャスミン viya/viya:①(adv)[BSk. //,v'iva(va iva)>viya]...の如く [iva,va とする]:②[疑問的に使用]na viya maññe 私は...でないと思う pupphāni/puppha(n.pl.acc)[Sk.puṣpa]花,華;月華,月経, maddavāni/maddava(a.n.pl.acc)[<mudu,Sk.mārdava<mṛdu]柔和,柔軟,しなびたる pamuñcati/pamuñcati(v.pr.3sg)[pa-muc]脱す,解脱す,出す,放つ; 捨つ,自由にす;

エワン	ラーガンチャ	ドーサンチャ	ヴィッパムンチェータ	ビッカヴォー
Evaṃ	rāgañca	dosaṇca,	vippamuñcetha	bhikkhavo.
このように、	貪欲と	憤怒とを	解き放つのだ。	比丘たちよ、

Evaṃ/evaṃ(adv)かく,かくの如く~eva この様に rāgañca=rāgañ/rāga(m.sg.acc)[//cf.rajaṭi]貪,貪欲,染;染色,色彩+ca/ca(conj)~と, また,しかし,~も,そして dosaṇca=dosaṇ/dosa:①(m)[Sk.doṣa]過惡,過失,欠点,病素②(m.sg.acc)[Sk.dveṣa]瞋,瞋恚+ca/, vippamuñcetha=vi/+p/+pamuñcetha/pamuñcati(v.opt.2pl)[pa-muc]脱す,解脱す,出す,放つ; 捨つ,自由にす←vippamutta(a)[vi-pamutta]脱する,自由となる bhikkhavo/bhikkhu(m.pl.voc)[Sk.bhikṣu<bhikkhāti]比丘,乞者,乞食者。

(25-9) Santakāyatheravattthu サンタカーヤ長老の物語 378

◆ santakāyoti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto santakāyatheraṃ nāma ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、サンタカーヤ(身体が静まった)長老について語られたものである。

この長者には手や足の動きに欠点というものがなかった、ということである。身体はあくびをして伸びをすることもなく、完全な状態だけがかった。彼は「ライオンの肚(はら)から来た」長老と言われていた。

ライオンというのは、ある日縄張りを持つと、金・銀・宝石・珊瑚の洞窟などのどれかに入り、鶏冠石(赤色)や雄黄(黄色)の粉の上に七日間寝て、七日目に起き上がり、寝た場所を調べて、もし尻尾や耳や手足を動かして鶏冠石や雄黄の粉が飛び散っているのを見ると、「これは生まれにも家系にも相応しくない」と、また七日間、食事を摂らずに寝るのである。粉が飛び散った状態がなければ、「これはお前の生まれ、家系に相応しい」と、棲家から出て伸びをし、四方を見渡して三回、ライオンの叫びを吼えて、餌を獲りに出ていくのである。

この比丘は、このような「ライオンの肚から来たもの」であった。彼の身体の動きを見て、比丘たちは師に告げた。「尊師よ、私たちはサンタカーヤ長老のような比丘をこれまで見たことがありません。彼のすわった場所には、手を動かしたり、足を動かしたり、身体で伸びをしたり、ということがありません。」師はそれをお聞きになって、「比丘たちよ、比丘というものはサンタカーヤ長老のように、身体のいろいろな部分が完全に静まっているべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「378 静まった身体、静まった言葉、静まり、よく精神集中し、世間の貪欲を吐き出した比丘は、『完全に静まった者』と言われる。」と。

法話が終わったとき、長老は阿羅漢果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は果報をもたらすものであった。

No.232 (2014 年 6 月) 心を読む能力 身体が心をあらわす You can read the mind but not the thoughts.

378.Santakāyo santavāco, Santavā susamāhito; Vantalokāmisso bhikkhu, Upasantoti vuccati.

378.体はしづか 語(ご)もしづか 心もしづか 定を得て 世間の利得 捨てし比丘 寂静者(ウパサンタ)とぞ呼ばるなる 訳: 江原通子

378. Santakāyo santavāco, santavā susamāhito [santamano susamāhito (syā. pī.), santamano samāhito (ka.)]; Vantalokāmisso bhikkhu, “upasanto”ti vuccati.

378.身体が寂静で、言葉が寂静で、〔心が〕善く定められた寂静なる者―世の財貨を吐き捨てた比丘は、「寂静者」と呼ばれる。

サンタカーヨー	サンタワーチョー	サンタワー	スサマーヒト
Santakāyo	santavāco,	santavā	susamāhito,
身体が寂静で、	言葉が寂静で、	寂静なる者	〔心が〕善く定められた

Santakāyo=Santa/santa: ①(a 有持)[sammati①śam:pp]寂静の、寂止の、寂者②(a)[sammati ②śram:pp.]疲れた、疲労の③(a)[=sant,sat as:ppr]ありつつ、現存の;善き、正しき、善人←sammati: ①(v)[Sk.samyati śam ①]静まる、寂止す、休息す、住む②(v)[Sk.sramyati śram] 疲れる③(v)[Sk.samyati śam ②]働く、満足する④(f)[=sammuti<saṃ-man]-ñāṇa 世俗智+kāyo/kāya(m.sg.nom)身、身体、集まり
santavāco=santa/+vāco/vācā(f→m.sg.nom)語、言、santavā/santavant(a.m.sg.nom)[santa ①-vant]寂静なる
susamāhito/susamāhita(a.m.sg.nom)[su-samāhita]よく定置(等待、統一)した←samādahati(v.pp): ①[=samādheti,sam-ā-dhā]定める、置く、(心を)統一する②[sam-ā-dah]燃やす、焼く;

ワンタローカーミソー	ビククウ	パサントー	ティ	ウッチャティ
Vantalokāmisso	bhikkhu,	upasanto	ti	vuccati.
世の財貨を吐き捨てた	比丘は、	「寂静者」	と	呼ばれる。

Vantalokāmisso=vanta/vanta(a 有持)[vamati の pp]吐きたる、排除せる、吐瀉物-lokāmisa 世財を吐き出せる+loka/loka(m 依処)世、世間、世界-āmisa 世間財+āmiso/āmisa(n→m.sg.nom)[<āma,Sk.āmiṣa]財、食、味、利益 bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘、乞者、乞食者、“upasanto/upasanta(a.m.sg.nom)[upa-śam の pp]寂静なる、静まれる”ti/vuccati/vuccati:vuccate(v.pr.3sgd)[vac:pass]言われる。

(25-10) Naṅgalakulatheravattthu ナンガラクラ長老の物語 379-380

◆ attanā codayattānanti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto naṅgalakulatheraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ナンガラクラ長老について語られたものである。

ある貧しい男が他人のために賃仕事をして生活していた、ということである。ある比丘が、その男がぼろ布一枚をまとって働を担いで歩いているのを見て、次のように言った。「あなたがそんな風に暮らしているなら、出家したほうがよくはないかね」と。「尊師よ、こんな風に暮らしている私を、誰が出家させてくれるでしょうか。」「もしあなたが出家するというなら、私があなたを出家させよう。」「いいでしょう、尊師よ。もしあなたが私を出家させてくださるなら、出家いたします。」

そこで、その長老は彼をジェータヴァナ精舎につれていき、自分の手で沐浴させて、〔儀式を行うために特別に区切られた〕丸囲いの庭(マールカ)の中に立たせて出家させ、身につけていたぼろ布一片と一緒に鋤をその丸囲いの庭の中の樹木の枝に掛けさせた。そこで、貧しい男は具足戒を受けたときに、ナンガラクラ(鋤族)長老として知られた。

彼はブツダたちに捧げられる利得と尊敬によって生活していたが、俗世が恋しくなり、俗世に戻りたい気持ちを拭き去ることができなかったので、「今や信心ある人々に布施された袈裟を着て歩くことはできない」と、例の樹木の元へ行き、自分で自分を論じた。「恥知らずめ、羞恥なき者よ、おまえはこれ(ぼろ布)を着て還俗し、賃仕事をして暮らしたくなったのか」と、このように自分自身を論していると、彼の心は和らいだ。彼は戻ってふたたび数日経つと、また落ち着かなくなり、同じように自分を論じて、心を翻した。彼はこのような仕方、俗世が恋しくなるとそこへ行って自分を論じた。

すると、比丘たちは彼が度々そこへいくのを見て、「ご同朋ナンガラクラ長老様、どうしてそこへ行くのですか」と訊ねた。彼は、「阿闍梨のもとへ行くのです、尊師方よ」と答えた。そうして数日の後に、彼は阿羅漢果を獲得した。すると、比丘たちは彼のことをからかって言った。「ご同朋ナンガラクラ長老さま、あなたが探求した道は無用になったようですね。阿闍梨の元へは行かないようにお見受けします。」「その通りです、尊師方よ。私に執着があったときは行きました。今は私の執着は断ち切られました。ですから、行きません。」

それを聞いて比丘たちは、「彼は本当ではないことを言って、別のように説明しています」と師にそのことを言いつけた。師は、「比丘たちよ、その通りです。私の息子は自分で自分を戒めて、出家者のなすべきことの頂上へ到達しました」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「379 自己により自己を戒めよ、自己により自己を抑えよ、自己を制御し、念慮ある比丘は、安楽に過ぐす。」「380 自己が自己の主であり、自己が自己の赴く処であるから、それゆえ自己を制御せよ、商人が良馬を御するように。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.233 (2014 年 7 月) 修行とは自分に出会うこと 社会は自分を育てません Meet yourself

379. Attanā codayattānaṃ, Paṭimamsetha attanā; So attagutto satimā, Sukhaṃ bhikkhu vihāhisi.

380. Attā hi attano nātho, (Ko hi nātho paro siyā)※. Attā hi attano gati; Tasmā samyamamattānaṃ, Assaṃ bhadramva vāṇijo.

379. 自(みつ)から己を点検し 自から己を省りみよ それにて自己が守られて 念(サティ)ある者の幸せに 比丘よ そなたは住むならん

380. 己こそ己の主(あるじ) (如何にして他が己の主とならん)※ 己こそ己の寄辺(よるべ) それ故 自心(じしん)を自制せよ 商人 賢馬を馴らすごと ※ミャンマー版のみ 訳: 江原通子

379. Attanā codayattānaṃ, paṭimamsetha attanā [paṭimāse attamattānā (sī. pī.), paṭimamse tamattānā (syā.)]; So attagutto satimā, sukhaṃ bhikkhu vihāhisi.

379. 自己によって自己を叱咤せよ。自己によって〔自己を〕反省せよ。比丘よ、〔まさに〕その〔あなた〕は、自己が守られた、気づきある者となり、安楽に住むであろう。

アッタナー チョーダヤッターナン パティマンセーター アッタナー

Attanā codayattānaṃ, paṭimamsetha attanā;

自己によって 自己を叱咤せよ。 反省せよ。 自己によって〔自己を〕

Attanā/attan(m.sg.inst)[Sk.ātman]我,自己,我体 codayattānaṃ=codaya/codayati=v.codeti(v.imper.2sg)[Sk.codayati<cudのcaus.]督促す,呵責す,責める,詰問す+attānaṃ/attan(m.sg.acc)[Sk.ātman]我,自己,我体, paṭimamsetha/paṭimāseti(v.opt.反照態3sg)[paṭimasatiのcaus]熱慮す,檢察す←paṭimasati(v.caus)[paṭi-mṛś]触れる,舐める,,逆摩す,逆にこする attanā/;

ソー アッタグットー サティマー スカン ビック ヴィハーヒスイ

So attagutto satimā, sukhaṃ bhikkhu vihāhisi.

その〔あなた〕は、〔まさに〕自己が守られた、気づきある者となり、安楽に 比丘よ、住むであろう。

So/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,その,彼女 attagutto=atta/attan(m 有持)[Sk.ātman]我,自己,我体+gutto/gutta(a.m.sg.nom)[Sk.gupta<gupのpp]守られたる,守護されたる satimā/satimant(a.m.sg.nom)[sati-mant]具念の,有念者, sukhaṃ/sukha(a.n.sg.acc.adv)[〃]楽,安楽,幸福-vihāra 楽住-vihārin 楽住者 bhikkhu/ bhikkhu(m.sg.voc)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘,乞者,乞食者

vihāhisi/viharati(v.fut.2sg)[vi-hṛ]住す,居住す。

380. Attā hi attano nātho, (ko hi nātho paro siyā) [() videsapothakesu natthi] Attā hi attano gati; Tasmā samyamamattānaṃ

[samyamaya'ttānaṃ (sī. pī.)], assaṃ bhadramva vāṇijo.

380. まさに、自己は、自己の主。まさに、他の誰が、主として存するというのだろうか。まさに、自己は、自己の赴く所。それゆえに、自己を自制せよ—商人が、賢馬を〔調御する〕ように。

アッター ヒ アッタノー ナートー アッター ヒ アッタノー ガティ

Attā hi attano nātho, Attā hi attano gati;

自己は、まさに、 自己の 主。 自己は、まさに、 自己の 赴く所。

Attā/attan(m.sg.nom)[Sk.ātman]我,自己,我体 hi/hi(adv.conj)実に;何となれば tena hi 然らば attano/ attan(m.sg.gen)[Sk.ātman]我,自己,我体 nātho/nātha(m.sg.nom)[〃]主,守護者,ナータ神,依怙,救護, Attā/ hi/ attano/ gati/gati(f.sg.nom)[〃]趣(しゅ:衆生が自己の業(ごう)によって得る生存の状態、また世界);

タスマー サンヤママッターナン アッサン バドゥランワ ワーニジョー

Tasmā samyamamattānaṃ, assaṃ bhadramva vāṇijo.

それゆえに、 自己を自制せよ 馬を 賢(い)馬〔調御する〕ように。 商人が、

Tasmā/ta(人指示代 n.sg.abl)彼,その,彼女 samyamamattānaṃ=samyama/samyamati(v.imper.2sg)[sam-yam]抑制す,自制す+m/+attānaṃ/attan(m.sg.acc)[Sk.ātman]我,自己,我体, assaṃ/assa(m.sg.acc)[Sk.aśva]馬

bhadramva=bhadram/bhadda:bhadra(a.n.m.sg.acc)[Sk.bhadra]賢き,吉祥の,吉瑞;牛;矢の一種+iva/iva(indecl)[〃 BSk.viya]如く=viya,va vāṇijo/vāṇija:vāṇijaka(m.sg.nom)商人。

(25-11) Vakkalitttheravatthu ヴァッカリ長老の物語 381

◆ pāmojjabahuloti imaṃ dhammadesanaṃ satthā veluvane viharanto vakkalitttheraṃ ārabha kathesi.

この法話は、師が「ラージャガハ市の近くの」竹林精舎に滞在しておられたときに、ヴァッカリ長老について語られたものである。

この尊者は、サーヴァッティー市の婆羅門の家に生まれて成人し、托鉢に市内に入ってこられた如来を見て、師のお体の完全な美しさを観察し、身体の完全さを見たことで「自分のありように」不満をいただき、「私もいつも如来を見ていたいものだ」と師のもとで出家し、そこに立つと〈十の力を持つお方〉(ブッダ)を見ることができるところに立ち、聖典の読誦や瞑想の主題を念ずることなどの勤めを放棄して、ひたすら師を見つめて過ごしていた。師は彼の智が成熟するのを待って何も言わずに、「今、彼の智は成熟した」と知ったとき、

「ヴァッカリよ、この不浄に満ちた身体を見ることが、あなたにとって何の意味があるのですか。ヴァッカリよ、法を見るものこそが、私を見るのです」とおっしゃって戒められた。ヴァッカリはこのように戒められても、師を見るのをやめて他所にいくことはできなかった。すると師は、「この比丘は焦燥心を駆り立てられないと、覚らないであろう」と考えられて、雨安居に入る日が近づくとうラージャガハ市に行き、雨安居に入る日に、「ヴァッカリよ、離れなさい」と「ご自分と一緒にではなく他所へ」行かせた。

ヴァッカリは、「師は〔雨安居の間〕私に話しかけてくださらない」と、三カ月も師の方を向いて立つことができなくなったので、「私の命が何になろう。山から飛び降りよう」と〈鷲の峰〉に登った。師は彼が苦しんでいることを理解されて、「あの比丘は私のもとで安心を得なければ、修行の道果を得る機根をだめにしてしまうだろう」と、ご自分を見せるために光明を発せられた。すると、ヴァッカリは師を見た途端、それほどまでに大きくなっていった悲しみが消えた。師は乾いた溜池を洪水で満たすかのように、長老に力強い喜悅歡喜を生じさせ、次の詩句を唱えられた。

「381 歡喜に満ちた比丘は、ブッダの教えに心浄め、寂靜の境地に達する、存在の作用が静まった安樂に。」と。この詩句を唱えられてから、師はヴァッカリ長老に手をさしのべられ、「来なさい、ヴァッカリよ、如来を見つ、恐れるな。私はあなたを引き上げる、泥沼にはまった象を引き上げるように。」「来なさい、ヴァッカリよ、如来を見つ、恐れるな。私はあなたを引き上げる、ラーフに捕らえられた太陽を引き上げるように。」「来なさい、ヴァッカリよ、如来を見つ、恐れるな。私はあなたを引き上げる、ラーフに捕らえられた月を引き上げるように。」と、これらの詩句を唱えられた。

ヴァッカリは、「私は〈十の力を持つお方〉を見た。『来なさい』という呼び声もいただいた」と、強い喜びを起こして、「どこへ行くべきだろうか」と行くべき道が見当たらないので、〈十の力を持つお方〉に向かって空中に飛び上がり、詩句の最初の句のところで山に立ち、師によって唱えられた詩句を念じながら、空中で歡喜を静めて、無碍解とともに阿羅漢果に到達し、如来を礼拝しつつ降りて師のそばに立った。師は後に、彼を信仰熱心の第一の地位につけられた。

No.234 (2014 年 8 月) 喜びに満たされる心 人格向上の栄養剤 Contentment incites wisdom.

381.Pāmojjabahulo bhikkhu, Pasanno buddhasāsane; Adhigacche padam santam, Sankhārūpasamamsukham.

381.悦びに満ち 心から ブッダの教え奉ず比丘 諸行寂止の樂を得て 寂靜の境に到るべし 訳：江原通子

381. Pāmojjabahulo bhikkhu, pasanno buddhasāsane; Adhigacche padam santam, saṅkhārūpasamam sukham.

381.歡喜多き比丘は、覺者の教えに清らかな信ある〔比丘〕は、寂靜の境地に到達するであろう—形成〔作用〕の寂止という安樂〔の境地〕に。

パーモッジャバフロー	ビク	パサンノ	ブッダサーサネー
Pāmojjabahulo	bhikkhu,	pasanno	buddhasāsane;
歡喜多き	比丘は、	清らかな信ある〔比丘〕は、	覺者の教えに

Pāmojjabahulo=pāmojja/pāmuja(n 有持)[pa-mud の grd]=pāmojja 悦、喜悅、勝喜、欣悅+bahulo/bahula(a.m.sg.nom)[bahu-la]多く、多数、富める、熱心な、屢々の bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu<bhikkhati]比丘、乞者、乞食者、
pasanno/pasanna(a.m.sg.nom)←pasādati(v.pp)[pa-sad]浄まる、喜ぶ、信ずる buddhasāsane=buddha/buddha(a.m 依属)[bujjhati の pp] 覺った、目覺めたる、覺知せる、覺者、仏陀、仏-sāsana 仏教+sāsane/sāsana(n)[Sk.sāsana<śās]教、教説、信書、使書、通牒、

アディガッチェー	パダン	サンタン	サンカールーパサマン	スカン
Adhigacche	padam	santam,	saṅkhārūpasamam	sukham.
到達するであろう	境地に	寂靜の	形成〔作用〕の寂止という	安樂〔の境地〕に。

Adhigacche/adhigacchati(v.opt.3sg)[adhi-gam]到達す、証得す padam/pada(n.sg.acc)足、足跡、歩、句、語法 santam/santa:①(a.n.sg.acc)[sammati ①śam:pp]寂靜の、寂止の、寂者②(a)[sammati ②śram:pp.]疲れた、疲労の③(a)[=sant,sat as:ppr]ありつつ、現存の、善き、正しき、善人←sammati:①(v.pp)[Sk.samyati śam ①]静まる、寂止す、休息す、住む②(v)[Sk.sramyati śram]疲れる③(v)[Sk.samyati śam ②]働く、満足する④(f)[=sammuti<sam-man]-nāṇa 世俗智、saṅkhārūpasamam=saṅkhāra/saṅkhāra(m 依属)[Sk.BSk.samskāra<sam-kr]行、為作、(行為とその習慣力)、形成力、現象+upasamam/upasama(m.sg.acc)[Sk.upasama]寂靜、寂止、休息、止息
sukham/sukha(a.n.sg.acc)[/]樂、安樂、幸福。

(25-12) Sumanasāmaṇeravattu スマナ沙弥の物語 328

◆ yo haveti imaṃ dhammadesanaṃ sathā pubbārāme viharanto sumanasāmaṇeraṃ ārabha kathesi. tatrāyaṃ anupubbī kathā –
この法話は、師が〔サーヴァッティー市の近くの〕東園精舎に滞在しておられたときに、スマナ沙弥について語られたものである。

これには次のような順序に従った物語がある。

- a. 過去物語 — ウパリッタ独覚に布施食を捧げたアンナバーラ
- b. 現在物語 — アヌルッダの少年時代と出家
- c. スマナ沙弥とナーガ王パンナカ

a 過去物語——ウパリッタ独覚に布施食を捧げたアンナバーラ
パドウムツタラムのときに、一人の良家の息子が、師(パドウムツタラム)が四衆(比丘、比丘尼、在家信者、在家信女)の真ん中で、ある比丘を天眼を持つ者の第一の地位につけられたのを見て、同じ栄光を願いつつ師を招待し、七日間、ブツを始めたとする比丘サンガに布施を捧げ、「尊師よ、私も将来、一人のブツダの教団で天眼を持つ者の第一になれますように」と誓願を立てた。

師は一万劫を観察されて、彼の誓願が成就することを知り、「今から一万劫の後に、ゴータマ仏の教団で天眼を持つ者の第一のアヌルッダというものになるであろう」と予言した。彼はその予言を聴いて、翌日にも成就するかのようにその栄光を思い、師が般涅槃されると、比丘たちに天眼を得るための準備〔となる行為〕を質問し、セヨージャナの金の仏塔を囲んで幾千もの松明の火を作らせて灯火の供養をして、そこから死没して天界に生まれ、神々と人間のあいだを一万劫のあいだ、輪廻の生存を繰り返した後、今の劫でバーラーナシー市の貧しい家に生まれ、スマナ長者に頼って長者に〔食用の〕草を運ぶ者として生業をたてた。それでアンナバーラ(食べ物を運ぶ者)という名前で呼ばれた。

さてある日、ウパリッタという独覚がガンダマーダナ山で滅尽定から出て、「誰に愛護を与えようか」と考え、「今日、私はアンナバーラに愛護を与えるのがよかろう。今彼は、荒野から草を取って家に戻ろうとしている」と知って、鉢と衣を取って神通力で飛んでいき、アンナバーラの面前に立った。アンナバーラは独覚が空の鉢を手に見て、「尊師よ、托鉢の食は得られますか」と訊ねると、「得られるでしょう、福德の大きな人よ」と答えたので、「尊師よ、それならば少しお待ちください」と、草を運ぶ天秤棒をうち捨てて急いで家に帰り、「妻や、私のためにとっておいた食べ物の分け前があるかね、ないかね」と妻に訊ね、「ありますよ、旦那さま」と妻が答えると、急いで後から来る独覚の鉢を受け取り、

「私に布施をしようという気持ちがあっても布施できるものがなく、布施できるものがあるときは、受け取ってくださいるお方が得られなかった。しかし、今日は受け取るお方に会い、布施できるものがある。本当に私は幸運だ」と家に戻って食事を鉢に盛り付けて、持って行って独覚の手に鉢を置き、「尊師よ、このような惨めな生活から解放されますように。」「ない」という言葉を聞かなくなりますように」と誓願を立てた。独覚は、「そうなるように、福德の大きな人よ」と言って感謝の法話をして、去っていった。

スマナ長者の家の傘蓋に住む神霊も、「何と素晴らしい布施だろう。最高の布施がウパリッタに確かに捧げられた」と言って、三回「素晴らしい」と称賛を与えた。そこで、長者が、「これまでのあいだ、私は布施を与えていたのに、見なかったのか」と言った。すると、神霊は、「私はその布施について称賛を与えたのではありません。アンナバーラがウパリッタ独覚に捧げた鉢食に心浄められて、私は彼に称賛を与えたのです」と答えた。長者は、「なんと驚くべきことか。私はこれまでのあいだ、布施を捧げても神霊に称賛を与えてもらうことはできなかった。アンナバーラは私に頼って生活して、一度きりの鉢食によって称賛を与えられた。彼の布施に見合うことをして、彼の布施食〔の功德〕を私のものにしよう」と考えて、アンナバーラを呼ばせて、

「今日、おまえはだれかに何かをお布施したか」と訊ねた。「はい、旦那さま。ウパリッタ独覚さまに、今日私は食事の一部を差し上げました。」「そうか。カハーパナ金貨を受け取って、それを私が与えた鉢食ということにしてくれ。」「それはいたしません、旦那さま。」「長者は金額を千金にまで増やしたが、アンナバーラは千金でも応じなかった。すると、長者は、「まあよい。鉢食を譲らないというなら、千金を受け取って、私に〔功德の〕分け前をくれ」と言った。アンナバーラは、「尊者さまと相談してお答えします」と大急ぎで独覚に追いついて、「尊師よ、スマナ長者が千金を出して、あなたさまに捧げた鉢食の分け前を求めています。私はどうすればいいでしょうか」と訊ねた。すると、独覚は彼に譬え話をした。

「賢い者よ、百の家がある村で一つの家が灯火を燃やすとして、残りの家が自分たちの油で灯火の芯を濡らして灯火を移して燃やさせるとしたら、それは最初の灯火の光が『ある』と言うべきかどうかでしょう。」「尊師よ、光の数が増えます。」「そのように、賢い者よ、あなたが匙一杯の粥なり杓子一杯の食事なりであっても、自分の布施食は他の人々に分け前を与えて、どれだけ与えてもそれだけ増えるのです。あなたはたった一人に布施食を与えましたが、長者は布施の分け前によって捧げたので、二人分の布施食になったのです。一つはあなたのもので、もう一つは長者のものです。」「アンナバーラは、「よくわかりました、尊師よ」と独覚に挨拶して長者のところへ戻り、

「旦那さま、分け前をお受け取りください」と言った。「では、私からカハーパナ金貨を受け取りなさい。」「私は布施食を売りません。信心によって、あなたに分け前を与えるのです。」「あなたが信心によって与えるというなら、私はあなたの徳を供養しよう。金貨を受け取りなさい。今からは自分の手で仕事をしてはならない。大通りに家を作らせて住みなさい。何でも必要なものがあれば、すべて私のところから持っていきなさい」と言った。滅尽定から立ち上がった者に捧げた布施食は、その日のうちに果報をもたらすのである。そこで、国王もその出来事を聞き、アンナバーラを召し出させて、布施の分け前を受け取り、そのかわりに大きな財産を与え、彼に長者の地位を与えた。

アンナバーラはスマナ長者の友人になり、命の限り功德を積んで、そこから死没して天界に再生し、神々と人間のあいだで輪廻の生存を繰り返し、今のブツダが現れたとき、カピラヴァットゥ市でサーキヤ族のアミトダナ(甘露飯)の家に生まれ、人々はアヌルッダと名付けた。彼はマハー・ナーマの弟で、師の叔父(アミトダナ)の息子にあたり、とても繊細で大きな福德を具えていた。

b 現在物語——アヌルッダの少年時代と出家

ある日、六人のクシャトリヤ族の少年たちが饅頭を賭けて玉遊びをしていたが、アヌルツダは負けて、饅頭を受け取りに母親のところへ使者を送った。母親は大きな金の器に饅頭をいっぱいにして送った。饅頭を食べてまた遊んだが、また負けて同じように饅頭を取りに行かされた。こうして三度も饅頭をもらってきたが、四度目に母親は、「もう饅頭はない」と返事をした。アヌルツダは母親の言集を聞いたが「ない」という言葉を聞いたことがなかったので、「〈ない饅頭〉というものが今度はあるのだろう」と思い、「〈ない饅頭〉をもらっておいて」と使者を送った。そこで、彼の母親は「奥さま、〈ない饅頭〉というものをください」と言われたとき、「私の息子は〈ない〉という言葉聞いたことがなかったのだ。どうやって〈ない〉ということをはっきりさせようか」と、金の器を洗って、もう一つの金の器で蓋をして、「さあ、おまえ、これを私の息子に渡しなさい」と送った。

そのとき、都を守護する神霊たちが、「私たちのご主人はアンナバーラであつたときに、ウパリツタ独覚に食車の一部を捧げて〈ない〉という言葉聞くことがないように、と誓願を立てた。私たちがそのことを知っていながら見過ごしたら、我々の頭は割れてしまうだろう」と考えて、神の饅頭で器を満たした。使者の男は器を持ってきて、少年たちのところに置いて蓋を開けた。その饅頭の香りは都じゅうに広がった。饅頭は口に入れた途端、七千の味覚神経に広がってとどまった。

アヌルツダは考えた。「母はこれまで私のことを愛していなかったのだらう。だってこれまで、母は〈ない饅頭〉を作ってくれたことがないのだから。」彼は家に帰って母にこう言った。「母さま、私はあなたにとって愛しくないのですか。」「息子や、何を言うのです。私の両目よりも、心臓の肉よりも、お前は愛しいのですよ。」「母さま、もし私があなたにとって愛しいなら、どうして私にこれまであのような〈ない饅頭〉というものを作ってくださらなかったのですか。」

母親は使いの男に訊ねた。「おまえ、器の中に何かあつたのですか。」「はい、奥さま。器は饅頭で一杯でした。私はあのようなものは見たことがありません。」母親は考えた。「私の息子には福德があつたのだらう。神霊が彼に天の饅頭送ったにちがいない。」アヌルツダも母親に言った。「母さま、私はあのような饅頭を今まで食べたことがありませんでした。これからは私に〈ない饅頭〉だけを作ってください。」母親はそれ以来、「饅頭が食べたい」と言われたときは、金の器を洗って別の器で蓋をして送った。神霊たちが器を満たした。このようにしてアヌルツダは家の中に住んで、〈ない〉という言葉の意味を知らずに、天の饅頭を食べていた。

さて、師が弟子を集めるために〔カピラヴァットウ市の〕家々を順にめぐり、サーキヤ族の青年たちが出家したとき、サーキヤ族のマハー・ナーマが、「弟よ、我々の家からは誰も出家した者がいない。おまえが出家するべきか、それとも私が出家するべきかな」と言ったとき、アヌルツダは答えた。「私はとても繊細で、出家はできません。」「それなら仕事をしなさい。私が出家しよう。」「その仕事とは何ですか。」アヌルツダは食べ物ができるのかも知らなかったのだから、仕事というものをどうして知るはずがあるのか。それゆえ、このように言ったのである。

実はある日、アヌルツダとバツディヤとキンピラの三人は、「ご飯というものはどこで生じるのだらう」と議論した。彼らのうちキンピラは、「倉庫で生じるのだ」と言った。彼はある日、米が倉庫に入れられるのを見たことがあった。それで「倉庫でご飯は生まれる」という観念をもって、そのように言ったのである。すると、バツディヤが彼に「君は知らないのだな。ご飯というのは、鍋の中で生じるものだ」と言った。バツディヤはある日、鍋からご飯が盛られるのを見て、「ここでご飯は生まれる」という観念を持ったので、そのように言ったのである。アヌルツダは二人に「君たちは知らないのだな」と言い、「宝石の嵌め込まれた大きな金の器の中で、ご飯は生じるのだ」と言った。アヌルツダは米が搗かれるところも、ご飯が炊かれるところも、見たことがなかった。金の器に盛られて目の前におかれたご飯だけを見ていた。それで「器の中にそれが生じる」という観念を持ったので、そのように言ったのである。このようにご飯ができる場所も知らないのだから、大きな福德を持つ良家の息子が、仕事というものをどうして知り得ようか。

兄のマハー・ナーマは、「来なさい、アヌルツダよ。家に住むために、お前に教えてあげよう。最初に田畑を耕さなければならぬ」などなどと、兄が説明する仕事に際限がないのを聞くと、アヌルツダは、「私は家に住むのは、やめます」と、母親の許しを得て、バツディヤを始めとする五人のサーキヤ族の貴公子たちと共に家を出て、アヌピヤ・マンゴー林におられた師に近づいて出家した。出家してからは正しく修行をおさめて、次第に三明を獲得して、天眼によって、一つの座にすわったまま掌のうえに置かれたマンゴーを見るかのように、千の世界を観察することができるようになり、「過去の宿命を私は知る、天眼は浄められた、三明、神通力に私は到達した、ブツダの教えを実践した。」と、感興の語を発して、

「一体、私は何をして、この栄光を得たのだらう」と観察して、「パドゥムツトラ仏の足元で誓願を立てた」と知り、「ふたたび輪廻の中を廻っているうちに、しかじかのときに、バーラーナシーのスナナ長者に頼って生きていたときは、アンナバーラという者だった」と知って、「過去世で私はアンナバーラであり、貧しく、天秤棒を担いでいた。栄えあるウパリツタ(独覚)に、私は布施食を与えた。」と唱えた。

すると、彼の心にこのような考えが浮かんだ。「そのとき、私がウパリツタに捧げた布施食からカハーパナ金貨を出して分け前を受け取った、私の友人スナナ長者は、今生はどこに再生したのだらう」と。すると彼が「ヴィンジャ荒野の山の麓のムンダという市場町があって、そこにマハー・ムンダという在家信者に大スナナと小スナナという二人の息子がいるが、彼はそのうちの小スナナになって再生した」と天眼で見た。見てからまた考えた。「私がそこへ行って、役立つことがあるだろうか、ないだろうか」と。彼は瞑想して次のことを見た。「そこへ私が行くと、彼は七歳で家をでて、出家するだろう。そして、剃髪堂で阿羅漢果に到達するだろう。」そしてそれを見てから、雨安居が近づいていたので空を飛んでそこへ行き、村の入り口に降りた。

C スナナ沙弥とナーガ王パンナカ

ところで、マハー・ムンダ在家信者は、過去世でもアヌルツダ長老と親しい間柄だった。彼は長老が托鉢の時間に上衣をまわっているのを見て、息子のスナナに言った。「息子よ、私の尊いアヌルツダ長老さまがいらした。誰か他の人が尊者さまの鉢を受け取らないうちに行き、鉢を受け取りなさい。私は座を用意しよう。」息子はその通りにした。在家信者は長老を家の中で恭しくもてなし、三カ月の雨安居の住居を支出することを申し出た。長老は同意した。

さて、在家信者は長老を、一日面倒を見るかのように、三カ月のあいだ〔一日も疎かにせず〕世話をし、雨安居の終了式のために三衣と椰子蜜、胡麻油、米などを持ってきて長老の足元に置き、「尊師よ、お受け取りください」と言った。「や

めなさい、在家信者よ。私にこれは必要がありません。」「尊師よ、これは雨安居を過ごした者が受け取るべきものです。これをお受け取りください。」「やめなさい、在家信者よ。」「どうしてお受け取りにならないのですか、尊師よ。」「私のところには身の回りの世話をする沙弥がおりません。」「尊師よ、それならば、私の息子の小スマナが沙弥になりましょう。」「在家信者よ、私は小スマナを必要としていません。」「尊師よ。それならば小スマナを出家させてください。」「長老は、「いいでしょう」と同意して、小スマナを出家させた。小スマナは、出家のために髪を剃る調髪堂で、阿羅漢果を得た。

アヌルッダ長老は小スマナと共に半月だけそこにとどまり、「師に会いに行きます」と言って小スマナの親族知人たちに暇乞いをして、〔小スマナを連れて〕空中を飛んでヒマラヤ地方のアランニャクティカー(森林僧房)に降りた。長老は元来、精進努力に熱心だったので、そこでも、夜の前半も後半も経行(歩く瞑想)を行っていたところ、腹痛を起こした。すると、長老が苦しんでいる様子を見て、〔小スマナ〕沙弥が訊ねた。「尊師よ、お具合が悪いのですか。」「私は腹が痛い。」「尊師よ、他のときも同じことがありましたか。」「そうです、ご同朋よ。」「尊師よ、そのときはどのようにして回復しましたか。」「ご同朋よ、アノータッタ湖からの水を得たので、元気になりました。」「尊師よ、それなら私が持ってきます。」「沙弥よ、あなたにできますか。」「できますとも、尊師よ。」「それなら、アノータッタ湖のパンナカというナーガ王が私を知っています。彼に話して、薬のために水瓶一つ分の水をもらってきなさい。」「沙弥は、「かしこまりました」と和尚を礼拝して空中に飛び上がり、五百ヨーヅナの距離を飛んでいった。

その日、ナーガ王はナーガの踊り子たちに囲まれて、水遊びを楽しみたいと望んでいた。彼は沙弥が近づいて来るのを見てと怒った。「あのムンダの子の修行者は、自分の足の塵を私の頭に撒き散らしながら飛んでいる。アノータッタ湖の水がほしくてやって来たのに違いない。今はあいつに水をやるまい」と五十ヨーヅナの広さのアノータッタ湖を、大きな器で鍋に蓋をするかのように、鎌首を広げて湖に蓋をして横になった。

沙弥はナーガ王の姿を見て、彼は怒っていると知り、次の詩句を唱えた。「恐ろしい火焰を持ち、大力あるナーガ王よ、私の言うことを聞け。私に水瓶一杯の水を与えよ、私は薬のために来たのだから。」と。それを聞くと、ナーガ王は次の詩句を唱えた。「東の方角に、ガンジスという大河あり、大海原を満たしている。そこからお前は水を取れ。」と。これを聞いて沙弥は、「このナーガは自分のわがままで水を与えないのだ。私が偉大な姿になり、大威力があることを知らせて彼をうちのめし、水を取ろう」と考えて、「大王よ、和尚さまが私にアノータッタ湖から水を持ってこさせるのです。ですから、私はそれを取っていきます。やめなさい、私を止めてはなりません」と言って、沙弥は次の詩句を唱えた。

「ここから私は水を取ろう、それだけに私は用がある。もしおまえに胆力があるなら、ナーガ王よ、遮ってみよ。」と。すると、ナーガ王は答えて、「沙弥よ、もしおまえに勇猛果敢があるならば、私はおまえの言葉に喜ぶぞ、私の木を取ってみよ。」と。すると、沙弥はナーガ王に、「大王よ、その通り取っていくぞ」と言い、ナーガ王が、「取れるものなら持っていけ」と答えると、「ならばよく覚えておけ」と三回、念を押してから、「ブッダの教えの威力を示してから、私が水を取るのがよからう」と考えて、天にいる神々のもとへ行った。

神々はやって来て礼拝し、「尊師よ、何の御用ですか」と言って立った。「このアノータッタの湖面で、ナーガ王パンナカと私の戦いがあるでしょう。そこへ行って、勝敗を見届けてください」と沙弥が言った。彼はそのようにして、四天王、サッカ、スヤーマ、サントウシタ、スニンミタ、ヴァサヴァッティン(六欲天の神々)という神々にも近づいて、そのことを伝えた。そこからさらに順に九つの梵天界に行き、それぞれの梵天たちもやって来て、礼拝して立ち、「尊師よ、何の御用ですか」と訊ねられると、同じことを話した。このように、沙弥は無想天の神々と無色界の梵天たちを除いて、あらゆるところをほんの短い一時のあいだに廻って伝えた。

沙弥の言葉を聞いて、すべての神々がアノータッタ湖の水面に、升到とされた鉛の粉が一面に広がるように、天空を隙間なく埋め尽くして集まった。神々の群れが集まると、沙弥は空中に立って、ナーガ王に言った。「恐ろしい火焰を持ち、大力あるナーガ王よ、私の言うことを聞け。私に水瓶一杯の水を与えよ、私は薬のために来たのだから。」と。すると、ナーガ王が唱えた。「沙弥よ、もしおまえに勇猛果敢があるならば、私はおまえの言葉に喜ぶぞ、私の水を取ってみよ。」と。

沙弥は三度、ナーガ王に念をおしてから、空中に立ったまま十二ヨーヅナの梵天の姿を造り出して、空から降りてナーガ王の鎌首を踏み、顔を下に捻じ曲げた。怪力ある男に踏まれた濡れた皮革のように、ナーガ王の鎌首からは、足踏みされた途端に鎌首同士の離れた場所から次々とターラ椰子の幹ほどの水柱が上がった。沙弥は空中で水瓶を水で満たした。神々の群れは称赞の声をあげた。ナーガ王は恥をかかされて、沙弥に怒り狂った。彼の両目はトウアズキの実のように赤くなった。ナーガ王は、「こいつは神々の群れを集めて私の鎌首の上に立ち、私を辱めた。こいつを捕まえて、口に手を入れて心臓の肉を握りつぶすか、両足を掴んでガンジス河の向こう岸まで投げてやる」と勢いよく追いかけたが、沙弥に追いつくことができなかった。

沙弥は帰って和尚の手に〔水瓶を〕置いて、「尊師よ、お飲みください」と言った。ナーガ王は後からやってきて、「アヌルッダ尊者さま、沙弥は私が与えていない水を取って帰りました、飲まないでください」と言った。長老は沙弥に訊ねた。「沙弥よ、そうなのですか。」「お飲みください、尊師よ。私は彼が与えた水を持ってきました。」長老は、「欲望を離れて阿羅漢になった沙弥に、嘘というものはない」とわかったので、水を飲んだ。その途端、長老の病気は治った。

ふたたびナーガ王は長老に言った。「尊師よ、沙弥にすべての神々の群れを集められて、私は辱めを受けました。私はこやつ達の心臓を破裂させるか、両足を掴んでガンジス河の向こうに投げてやります。」「大王よ、沙弥は大きな威力を持っています。あなたは沙弥と戦うことはできません。赦しを乞うてから帰りなさい。」「ナーガ王は自分でも沙弥の威力をわかってはいたが、恥をかかされたかと思って追いかけて来たのであった。そこで、長老の言葉に従って沙弥に赦しを乞い、沙弥と友情を結んで、「今からは、アノータッタ湖の水に用があるときは、あなたさまが来られる必要はありません。私に伝言を送ってください。私が持ってきて差し上げます」と言って帰っていった。

アヌルッダ長老も沙弥を連れて出発した。師はアヌルッダ長老が来ることを知って、〔サーヴァッティー市の近くの東園精舎の〕鹿母(ろくも)講堂で長老が来るのを待ちながらすわっておられた。比丘たちも長老が来るのを見ると出迎えて、鉢と衣を受け取った。すると、何人かの比丘たちが沙弥の頭や耳を掴んで揺すりながら、「小僧っ子沙弥よ、家が恋しくないかい」と言った。師は彼らの行為を見てお考えになった。「これらの比丘たちの振る舞いは罪深い。毒蛇の首を持つかのよう

に、沙弥を掴んで、彼の偉大さを知らないのだ。今、私はスマナ沙弥の徳を明らかにするのがよいだろう。」

長老も到着して師を礼拝してすわった。師は長老と挨拶を交わしてから、アーナンダ長老に話しかけられた。「アーナンダよ、アノータッタ湖の水で両足を洗いたい。沙弥たちに、水瓶を与えて水を運ばせなさい。」長老は精舎の中の五百人の沙弥を集まらせた。スマナ沙弥は彼らのうちで一番の新参者であった。アーナンダ長老は最年長の沙弥に言った。「沙弥よ、師がアノータッタ湖の水で足を洗いたいと願っておられます。水瓶を持って行って水を運んでください。」最年長の沙弥は、「尊師よ、できません」と言って行こうとしなかった。長老は他の沙弥たちにも頼んだ。彼らも同様に断った。ここに煩惱を断ち切った沙弥はいなかったのだろうか。いたのである。しかし、彼らは「これは私たちに託された花籠(責務)ではない。スマナ沙弥に託されたものだ」とわかっていたので、行こうとしなかったのである。まだ修行の道果を得ていない普通の者たちは、自分のできないことをしたくなかった。

最後にスマナ沙弥の順番がくると、アーナンダ長老が「沙弥よ、師がアノータッタ湖の水で足を洗いたいと望んでおられます。水瓶を持って水をもってきてくれますか」と言った。スマナ沙弥は、「師が持ってこさせるといことでしたら、持てきます」と言って、師を礼拝し、「尊師よ、アノータッタ湖から私に水をもってくると仰せですか」と言った。「その通りです、沙弥よ。」スマナ沙弥はヴィサーカー〔在家信女〕が作らせた純金の床の僧坊の中にある水瓶六十個分の水がはいる大水瓶を手で持って、「これを私が持ち上げて肩に載せて行く必要はない」と、持ち手の紐でぶら下げて空中に飛び上がり、ヒマラヤ山に向かって飛行した。

ナーガ王は沙弥が遠くからやってくるのを見て出迎え、水瓶を肩に担いで、「尊師よ、あなたさまは私のような下僕をお持ちなのに、どうしてご自分でいらしたのですか。水がお入用ならば、どうして伝言だけを送らなかつたのですか」と言って、水瓶に水を入れて自ら担ぎ上げて、「尊師よ、先に行ってください。私が運びます」と言った。「あなたは留まってください、大王よ。私が正しく覚ったお方に命じられたのです」とナーガ王を押しとどめ、水瓶の持ち手のところを手で掴んで、空中を飛んで帰った。

すると、師は沙弥が帰ってくるのをご覧になって、比丘たちにおっしゃった。「比丘たちよ、沙弥の遊戯を見なさい。空でハンサ鳥の王のように輝いています。」沙弥は水の入った瓶を置いて、師を礼拝して立った。すると、師は彼におっしゃった。「スマナよ、あなたは何歳ですか。」「私は七歳です、尊師よ。」「スマナよ、では今日から比丘になりなさい」とおっしゃって、相続の具足戒をお授けになった。七歳で具足戒を授かったのは、スマナとソーパーカの二人の沙弥だけである。このように彼が具足戒を受けたことで、法堂で話が持ち上がった。

「ご同朋よ、幼い沙弥にあのような威力があるとは驚くべきことです。私たちはこれまで、あのような威力は見たことがありません。」師が来られて、「比丘たちよ、何の話で今ここに集まってすわっているのですか」とお訊ねになり、「しかしかのことでございます」と答えると、「比丘たちよ、私の教団では、若くても正しく修行している者はあのような栄光を得るのです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「382 若い比丘であれ、ブッダの教えに努力する者は、この世界を照らす。雲から解放された月のように。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。比丘の章の註解 終わり 第二十五

No.235 (2014 年 9 月) 知識と智慧の違い 知識は苦の原因、智慧は安穩の原因 Knowledge promotes suffering, wisdom promotes happiness.

382.Yo have daharo bhikkhu Yuñjati buddhasāsane So imaṃ lokam pabhāseti Abbhā muttova candimā

382.たとえその年若くとも 比丘はブッダの教法に 専念すれば 世を照らす 雲間を出でし月のごと 訳：江原通子

382. Yo have daharo bhikkhu, yuñjati buddhasāsane; Soṃaṃ [so imaṃ (sī. syā. kaṃ. pī.)] lokam pabhāseti, abbhā muttova candimā. Bhikkhuvaggo pañcavīsatiṃ nīṭṭhito.

382.彼が、まさに、青年でありながらも、比丘として、覚者の教えに専念するなら、彼は、雲から解き放たれた月のように、この世を照らす。

ヨー	ハウエー	ダハロー	ビック	ユンジャティ	ブッダサーサネー
----	------	------	-----	--------	----------

Yo	have	daharo	bhikkhu,	yuñjati	buddhasāsane;
----	------	--------	----------	---------	---------------

彼が、	まさに、	青年でありながらも、	比丘として、	専念するなら、	覚者の教えに
-----	------	------------	--------	---------	--------

Yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの have/have(adv)[ha-ve]実に daharo/dahara(a.m.sg.nom)[/ 幼き、若き、幼少の bhikkhu/bhikkhu(m.sg.nom)[Sk.bhikṣu < bhikkhati]比丘、乞者、乞食者, yuñjati/yuñjati(v)[Sk.yunakti, yuñjati yuj] 軼す、結合す; 努力す buddhasāsane=buddha/buddha(a.m 依属)[bujjhati の pp] 覚った、目覚めたる、覚知せる; 覚者、仏陀、仏-sāsana 仏教 +sāsane/sāsana(n.sg.loc)[Sk.śāsana < śās] 教、教説; 信書、使書、通牒;

ソー	イマン	ローカン	パパーセーティ	アッパ	ムットーワ	チャンディマー
----	-----	------	---------	-----	-------	---------

So	imaṃ	lokam	pabhāseti,	abbhā	muttova	candimā.
----	------	-------	------------	-------	---------	----------

彼は、この	世を	照らす。	雲から	解き放たれた	月のように、
-------	----	------	-----	--------	--------

So/ta(人指示代 m.sg.nom)彼、その、彼女 imaṃ/ima(指代 m.sg.nom)これ lokam/loka(m.sg.acc)世、世間、世界 pabhāseti/pabhāseti(v.pr.3sg)[pa-bhās の caus]かがやく、明らかにする= obhāseti←bhāti(v)[bhā]輝やく、現われる pp.bhāta, abbhā/abbha(n.sg.abl), abbhā(f)[Sk.abhra]雲、黒雲-ghana 層雲-mutta 雲を離れたる-saṃvilāpa 雷鳴 muttova=mutto/mutta : ①(a.m.sg.nom)[muñcati muc の pp.Sk.mukta]脱せる、解脱せる、放出の②(n)[Sk.mūtra]小便、尿+iva/iva(indecl)[/ BSk.viya]如く =viya, va candimā/candimā, candima(m.f.sg.nom)[Sk.candramas m., candrimā f.]月-pabhā 月光。

Bhikkhuvaggo pañcavīsatiṃ nīṭṭhito. 比丘の章が第二十五となり、〔以上で〕終了した。